

毎度江を渡つて知府を訪ひ、いかにもして蔡九が擡擧を被り、再び官をなさんと欲しぬ。此日這黃文炳
 兩人の家僕に、多く新果等の禮物を持せ、乃ち一艘の快舟に乗て江を渡り、直ちに府裡に馳て、蔡九
 知府を訪ひける處に、此日府裡には遠來の珍客在て、酒宴を設け殊さら忙はしく見えしかば、黃文炳
 敢て知府に見えず、再び船を回して潯陽樓の下に至り、暫く暑氣を避んと舟を下り、直ちに潯陽樓に登
 り、自ら欄杆に倚左右の壁の上を見るに、許多題詠ありければ、即ち身を起して壁の邊に近々と來り
 一々これを読んで、遂に宋江が題したる西江月の詞と並に四句の詩を見て、忽ち大に驚いて云ふ、這詩
 は何者が書たるにや、正しく謀反の心を含たる反詩なりとて、頓て酒保を呼て問けるは、此兩篇の詩
 詞を作りたる者は誰なるぞや。酒保が云ふ、昨日一個の人來て只獨一瓶の酒を飲み、醉後に此詩を吟
 じ、壁の上に書ぬ。黃文炳が云ふ、凡そ何等様の者なりしぞ。酒保がいはく、面上に兩つの金印あり
 しかば、多くは營中の者なるべし。黃文炳が云ふ、必ず此兩篇の詩詞を刮無することなかれとて、自
 ら一紙を出してこれを寫し取、遂に樓を下り船に乗、其日は宿所に回りけり。翌日又兩人の家僕を從
 へて知府が家に至りければ、知府先人を出して、黃文炳を後堂に邀はしめ、小剋知府も又自ら後堂に
 出でて黃文炳に對面し、閑談已に罷りぬる處に、黃文炳知府に問て云けるは、しらす尊父太師の方
 より、近日使者到來しけるやいなや。知府が云ふ、前日書簡到來しぬ。黃文炳又問て云ふ、頃日京に
 は別に新しき事もあらざるや。知府が云ふ、近來京に頗る新しきこと有て騒動を催す。這回家父太師

が書中に、此事を示して云ふ、頃日大史院司天監奏聞して云やう、夜天象をみるに、岡星照て吳楚の
 分野の地に臨む。敢て亂をなす者あらんとて、我が這江州の地は別して牢く守るべきとの事なり。殊
 更小兒等が四句の語を誦て云ふ、

耗國因家木 刀兵點水工 縱橫三十六 播亂在山東

合都にはこれらの惟事有て、文武百官評議區々なり。此ゆゑに父太師急に書簡を下して、我此江州の
 地を就中嚴に守らしむ。あに奇異のことにあらずや。黃文炳これを聞き、良久しく沈吟して在しが、
 忽ち打笑て云ふ、此事良にゆゑあり。相公此詩を見て自ら曉し給へとて、彼壁に書たる詩の抄を取出
 して、知府に呈しければ、大に驚て云ふ、是眞に謀反の意を含し反詩なり。汝此詩を何れの處にて
 得たりしや。黃文炳がいはく、某昨日も已に相公を訪ひ奉りしか共、相公は自ら珍客を款待給ひて
 貴閑なきよし承しゆゑ、敢て尊顔を拜せず、再び江邊に至て直に回らんとせし處に、暑氣甚だ人を蒸
 して勝がたかりぬるにより、暫く潯陽樓に登て熱暑を避、壁に書し前人の吟詠などを見て、自らも
 詩興を催せし處に、こゝに又新題の詩詞あるを看けるに、乃ち此反詩にて候ゆゑ、早速これを抄し
 て尊覽に呈し奉る。知府が云ふ、しらす此詩は何等の者が書きけるや。黃文炳が云ふ、相公其姓名
 を見給へ、明らかに鄆城縣宋江作と云ふ五字あり。知府が云ふ、此の宋江と云ふは何者ならんや。黃文
 炳が云ふ、彼自ら分明に書て不幸にして文を雙頬に刺と云ければ、必定今當地に流れて、營中に入ぬ

る配軍にてぞ有べし。知府が云ふ、若果して配軍が所爲ならば、何の大事かあらん、決して憂にたらす。黄文炳が云ふ、相公必ずこれを軽く見給ふことなけれ。京の小兒等が謠ふ四句の恠言は、正に此配軍が身の上へ應せり。知府が云ふ、汝何を以てこれを知れりや。黄文炳が云ふ、耗國因三家木と云を以て、某熟々これを思ふに、國家の錢糧を耗散するの徒は、必定家頭に木の字を著べし。然らば是則ち宋の字なり。第二句に刀兵點水工と云ふを以てこれを思ふに、刀兵を興起するの徒は必定水邊に工の字を著べし、然らば明かに江の字なり。此反詩を書たる配軍は、姓は宋名は江と號す。此宋江都の謠言に應じて、反詩を書ぬこそ天數なり。若急に彼を除き給ふならば、民の福ひ何ごとか是にしかん。知府又問て云ふ、縦横三十六播亂在二山東と云ふは、何等の意ぞや。黄文炳答へて云ふ、縦横三十六と云ふは、或は六六の年或は六六の數なり。播亂在二山東と云ふは、今鄆城縣は是山東の地なり。此四句都て反詩の作者宋江に應せり。知府が云ふ、此反詩は何れの時書ぬるや。且つ此宋江當地に在やらん、未だ分明に知るべからず。黄文炳が云ふ、某昨日彼酒保に問けるに、彼答て前日來りて酒後にこれを書たりと告ぬ。若宋江を捉へんと欲し給はば、營中の文冊を查給へ。早速實告知れ候はん。知府が云ふ、汝が高見極て明かなり。宜く文冊を查べしとて、頓て左右に命じて營中の文冊を取らさせてこれをみるに、今五月の冊に於て、新配の流人等が名を寫したる内に、果して鄆城縣の宋江と云ふ者ありければ、黄文炳大に驚き、是則ち謠言に應せし者なり。小事に同じ

からざれば、之を早く捕はしめ給へ、萬一事延引に及んでは、風聲洩彼必定連夜に逃失、後悔して益あるまじ。知府これを聞て其議に同じ、其日兩院の押牢節級戴宗を呼て命じけるは、汝急に軍卒等を引て營中に馳せ、彼灣陽樓にて反詩を吟じたる罪人鄆城縣の宋江と云ふ者を捉へ來れ、必ず時刻を差へ自ら誤つことなけれ。戴宗命を奉、心中大に驚き、終に廳前を退出して役所に至り、頓て軍卒等を催し先約を定めけるは、汝等衆人各器械を持て、我が宿所彼城隍廟の間壁なる觀音庵に會合せよ、必ず時を過つべからずと命じ、且衆皆私宅へ歸りければ、此時戴宗は自ら仙術神行の法をなして暫時の間に先營中に至り、直に抄事房に入て宋江を見るに、獨安々と心よく床の上に打臥て在けるが、戴宗の來しを見て忙しく相迎へ云けるは、我前日城下に至て院長を問しかども、院長早他出有て庵門關したるにぞ、獨自ら灣陽樓に上り、一瓶の酒を酌覺えず大醉に及び、此兩日は悉々として快からず。今日も猶打臥ありぬ。戴宗が云ふ、其日長兄彼樓上の粉壁に何等の言語を書給ひしや。宋江が云、醉後の亂言はや全く忘れ畢ぬ。戴宗低言て云けるは、今蔡九知府某を廳前に呼て命じけるは、汝多くの軍卒を領し營中に馳、反詩を吟じたる罪人鄆城縣の宋江を捕へ來るべしと命を奉ぬ。此故に某是を知て大に驚き、先諸の軍卒等を我宿所に待しめ、我今預しめ來て、此のことを長兄に報ぬ。唯しらすいかなる計を以て、能く長兄を救はんや。宋江是を聞大に驚て云ふ、已にかくのごとくば、我命必ず脱れがたし、終に江州に於て自ら死を致さんこと、去とては無運なりとて、天を仰ぎ歎息し

て止ざりけり。戴宗良久しく默然として在けるが、忽ち計を思ひ出し、宋江に對して云けるは、某今長兄に一ツの計を施さしめ進せん、我は先回て少剋軍卒等を引て、再び來るべき間、長兄は宜しく頭髮を亂し、面上に泥を塗、詐て狂人の體にもてなし、地上に打倒れ、一向胡言亂語を呼で狂ひ給へ。然らば我又回て狂人のよしを知府に訴ふべし。宋江是を謝して云ふ、兎も角も賢弟の教へに順ふべき間、望らくは賢弟いよく我爲に力を竭し給へ。戴宗が云ふ、某豈敢て疎略あらんやとて、遂に宋江に別れ、城中に回り觀音庵に至り、諸の軍卒等を引て再び營中に来り、則ち高聲に呼はり問けるは、新來の流人宋江と云者はいづれに在や。牌頭官が云ふ、宋江は今已に抄事房にあり。宜しく某に従て來り給へ。戴宗並に諸軍を引て抄事房に至りける處に、宋江は頭髮を振亂し、面上に泥を塗、只願胡言亂語なして、呼り狂ひ地上に倒れ、則ち戴宗並に軍卒等を見て罵りけるは、汝ら何奴なれば我が王殿に入るや。戴宗故意大に怒り、即軍卒等に命じて宋江を捉へしめんとせし處に、宋江眼を瞬開て亂に打てかゝり、再三罵て云けるは、我は是玉皇大帝の女婿なり。丈人今十萬の天兵を我に與へて汝が這江州を攻しめ給ふ、乃ち閻羅大王を先鋒とし、五道將軍を後陣に備へ我は是大元帥として一ツの金印を授かれり。其重さは八百餘斤あり。汝らもし旗を捲て降參せずんば、唯一鼓に生捉んとて、四面八方に跑て狂ひしかば、諸の軍卒此光景を見て云けるは、此者原狂人なり、これを捉へて何の用かあらん。戴宗が云、誠に汝が云ふ所其理あり。先回りて知府相公に此光景を訴へ、若彌彼を捉

へ給はんとならば、再び來て捉ふべしとて、遂に衆人空しく城中へ歸りけり。此時蔡九知府は廳上に出で専ら消息を待居ける處に、戴宗頓て軍卒らと共に、廳前に至つて訴へけるは、彼宋江と云者は、原狂人にして頭髮を亂し面上を泥にし、只願亂言を呼つて地上に狂ひ倒れ、一點も正氣これなし。これによつて某等先これを捕へずして馳回りぬと、口を捕へ申ける。

梁山泊戴宗に假信を傳しむ(其上)

蔡九知府尙縁故を問はんとせし處に、彼黃文炳屏風の背後よりすゝみ出で云ひけるは、相公必ず此言を信じ給ふことなけれ。宋江が壁に書きたる詩詞の筆跡、決して狂人のなす所にあらず。恐らくは狂人と云ふには、詐あらん。先づ速かにこれを捉て試み給へ。知府が云、汝が言大いに可なりとて又戴宗に命じけるは、汝衆人善惡を論せず、彼罪人宋江を捉へ來れ。我専ら汝が音信を待たん。戴宗命を受け大いに苦しみ、再び軍卒らを引いて營中に至り、戴宗則ち人目を誑き暗に宋江に對して云ひけるは、黃文炳知府の影身に添うて妨るゆゑ、計調らず、再び命をうけて來れり。長兄先づ一旦擒となつて州里へ至り給へ。重て良計有るべしとて、宋江を捉へ囚車に入れ、則ち軍卒等これに擡せて、直ちに江州府裡に至りしかば、知府遂に宋江を塔の下に引かせこれをみるに、宋江知府を熊み大いに罵り呼ばはつて云ひけるは、汝は何者なれば我を捉へしぞ。我は是玉皇大帝の婿として、此度十萬の天兵を掌て大元帥となり、乃ち閻羅大王を前軍に備へ、五道將軍を後陣に備へ、急に汝を

活捕て江州城を焔焼せんと欲す。我が丈夫玉皇大帝我に賜つたる金印、重さ八百餘斤あり。汝ら若し早く災を避け去らざるば、死立地に至るべし。蔡九知府これ聞き、唯呆れる處に、黄文炳又知府に對して云ひけるは、相公速かに彼營中の差撥ならびに牌頭等呼び寄せ給ひて、此者初めて來りしより、此のごとき狂人にてありしや、又頃日よりの狂人なるや、具くこれを問ひ給へ。若し初めよりの狂人にてあらば、是則ち眞なり。若頃日よりの狂人ならば、是則ち詐なり。知府が云ふ、汝が言大いに當れりとて、則ち人を馳せて管營差撥ならびに牌頭ら呼んで、宋江が狂人の起りを問ひければ、管營差撥敢て偽らず、唯直言を以て訴へけるは、此者初めて來りし時は、狂人にあらず。定めて頃日より狂人になりしならん。知府此言を聞いて大いに怒り、忽ち左右に命じ、宋江を擱り倒さしめ、一連に痛く五十棒打たせしかば、皮開肉綻び鮮血淋漓、渾身紅に染けり。戴宗は此光景を見て、大いに寸心を惱しけれども、更に宋江を救ふべき計あらず、暗に萬千の悲歎を催すこゝ哀れなり。宋江初の間は猶胡言亂語を以て、狂人を詐り做けれども、拷問甚だ嚴なりしゆゑ、遂に白狀して云ひけるは、某前日潯陽樓に登つて大いに爛醉し、誤つて反詩を吟じぬ。毛頭別意あるにあらず。知府白狀を取つて、先づ重さ二十五斤の頸枷をかけ乃ち大牢の内に入れ置きて緊しくこれを守らせけり。戴宗は手下の牢守共に命じて宋江を懇に憐しめ、朝夕又自から酒食を牢中に送つて宋江を欺待けり。是によつて格別艱難の大牢に移れども、苦しみなかりしなり。扱蔡九知府は黄文炳を後室に邀へて深く

謝して云ひけるは、這次若し汝が高見にあらずば、必定宋江に誑るべし。黄文炳が云ふ、此事若し延引に及ば、悪かりなん。早々書簡を修へ給ひ、使者を京にはせ、宜しく尊父太師恩相に告げ知らせまゐらせ、相公國家の爲に大功を建玉ひしことを、帝へ奏聞ならしめて、高名を天下に振ひ給へ。知府これを聞いて大いに悦び、則ち黄文炳に謝して云ひけるは、我早々書簡を修へ、使者を都に遣し、足下此回の大功詳かに父太師が方へ告げ知らせ、早速天子に奏聞あらしめ、高下に大官大職を授け、互に富貴榮華に隆て共に相を重ね鼎を列ねて娛むべし。黄文炳が云ふ、某原來一身を門下に倚しことなれば、萬一寸進を得て立身することあらば、命を捨力を盡して相公の之恩を報すべし。蔡九知府此日一封の書簡を寫して、京に使者を馳せんとて、已に用意を調へしかば、黄文炳又云ふ、相公須く人を探みて此使者を命じ給へ。知府が云ふ、當地に兩院の節級戴宗と云ふは、能く仙術を曉し、神行の法をなし、一日の内に八百里の道を行く、唯好此者を遣はすべし。然らば上下の往來僅旬日の間ならん。黄文炳これ聞き果して如く調法の者あらば、大いなる幸なりと悦びけり。知府酒宴を設け、黄文炳を款待、夜も更けしかば黄文炳知府の家に一宿し、翌日早々回りけり。扱蔡九知府は多く金銀珠玉等の禮物を調へ、二ツの籠の内に收め、次の日戴宗を呼んで後室に至らしめ、則ち命じて云ふ、我此回二籠の禮物并に一封の書簡を以て、京の家父蔡太師が方へ送つて、來る六月十五日の生辰を賀せんと欲す。汝我が爲に勞を辭せず、京に登り全く事を調へ、返書を携へ回らば、我自ら重く

汝を賞すべし。汝彼神行の法にて、京に行かば上下の往來僅十日の内なるべし。必ず日限を差へず、早々恙なく歸郷せよ。戴宗命を受け、謹んで領承し、乃ち二籠の禮物と一封の書簡とを取つて、知府に拜別し、先づ家に歸りて禮物を櫃の内に收め、直ちに牢中に来て宋江にまみえて云ひけるは、長兄心を安んじ給へ。我此次京に上るこそ幸ひなり。蔡太師の力に少し計を施し、いかんともして長兄を救ふべし。我又旬日の内には必ず歸らんと思へば、明日より朝夕の飯食は、李逵に命じ送らしむべき間、心を寛げ我が回りを待ち給へ。宋江が云ふ、賢弟宜しく計を轉らして、我が一命を救ひ給へ。此時戴宗李逵を呼んで牢中に至らせ、乃ち語つて云ひけるは、宋長兄醉後誤て反詩を吟じ給ひぬるゆゑ、今かく擒となつて入牢し給ひ、我又知府が命を請けて東京に上る間、其内朝夕飯食は獨汝を頼むなれば、必ず怠りなく宋長兄に事て懇情を盡せ。李逵大いに怒つて云ふ、唯反詩を吟じたるのみに何の罪あらん。當世謀反を企る輩、悉く大官をなして安穩なり。某斯く在上は、誰か敢て宋長兄を惱さんや。若し妖恠にても宋長兄に仇せん者あらば、我平生の大斧を以て一々頭を砍劈べし。戴宗必す心を安んじ、東京に赴き給へ、某毛頭怠ることあるまじ。戴宗別れに臨んで、又再三李逵に命じて云ひけるは、賢弟必す酒を食て宋長兄の飯食を缺ことなかれ。若し萬一酒に酔て、自ら事を誤り、宋長兄にも艱難を請けしむることあらば、我深く汝を恨むべし。李逵が云ふ、長兄かくのごとく疑ひ給はば、我今日より酒を禁じ且暮牢中に在つて宜しく宋長兄に事ふべし。戴宗これを聞いて大に悦

で云ふ、賢弟もしあへて此のごとく心を留て宋長兄に事へなば、我全く心を安んずべし。假にも怒を發し争を惹ことなかれとて、遂に宋江に別れて牢中を出で、此日より、李逵は酒を斷て牢中に在り、且暮宋江に事へて寸歩も離れず懇慫に務めけるこそ優しけれ。さて戴宗は宿所に回り、旅粧を調へ書簡を便袋に收め、自ら籠を荷ひ、四ツの甲馬を双の腿に拴着、則ち神行の法を倣て咒語を念じ、遂に江州を離れて東京へと進發し、當日晩に至つて旅宿を求め、甲馬を取つて休息し、翌日未明に起て、また四ツの甲馬を兩の腿に拴つけ、遂に籠を荷て旅宿を出で、かの神行の術をなして飛ぶがごとくに跑しかば、千里を遠しとせざりけり。此日もはや紅日西山に傾き夕陽斜なりしかば、又旅宿を求めて休息し、翌日五更の一天に起早涼に乘じ神行をなし、足に信て馳せけるに、三百餘里を過時已に巳の上刻なり。戴宗少し疲れけるゆゑ、若しも清淨の酒店あらば、暫く憩んと欲し、左右を伺ひしか共、更に一座の酒店もあらざりけり。此時六月の初旬にて、天氣甚だ熱し、全身汗に濕ひ、殊更堪がたかりしかば、戴宗酷だ暑氣に中んことを恐れ、若し清き家もあらば暫時休息して暑氣をも避けんに、此所はいかなる困窮の地なれば、唯一軒の酒店もあらぬやと、頻りに憂ひける所に、遙なる樹木の側に水に傍湖に臨んで一軒の酒店ありしかば、戴宗大いに悦び、恰も電のごとく馳せて、酒店の前に至りしかば、乃ち頭を擧此所を見るに、清淨なる座鋪二十餘間あり。戴宗大いに悦び、自ら籠を荷ひ店の内に入り、一間の座に就て籠を卸衣を脱ぎ、則ち窓の欄杆に靠れ、暫らく休息しける所に、一人の酒保來

つて問ひけるは、貴客は酒を用ひ給ふや。戴宗が云ふ、酒は少し用ひんとす、多く與ふことなかれ。唯急に飯を携へ用ひしめよ。酒保がいはいは、我店には牛肉、猪肉、羊肉、鷄、鴨等の肴多し。貴客の好に依つてこれを進らすべし。戴宗云ふ、我は只素酒を吃して葷酒を用ひず。別に野菜あらばこれを與へよ。必ず肉を出すことなかれ。酒保これを聞いて再び走り出で、頓て一椀の菜蔬と、三碗の酒とを携へ出ければ、戴宗は飢渴の餘り、これを過半用ひて又飯を求めんとせし處に、忽ち天旋り地轉り眼花み舌癱て、遂に座上に倒れけり。此處は則ち梁山泊の下にして、此店は是朱貴が酒肆なり。此時朱貴戴宗が蒙汗藥に中て倒れたるを見て、座上に出來り、乃ち彼小賊兩人に命じ籠を收めしめ、又戴宗が懷中を捜させる處に、一ツの便袋を取出し、其内を見るに一封の書簡有りしを朱貴に與ふ。朱貴これを接へ、封皮の上をみるに、幾ばくの文字を書して、平安家書百拜奉ニ上父親大人膝下ニ男蔡德章謹封と有りければ、朱貴則ち封を披き是をみるに、其内の文句にいはいは、

見今拏得應コ謠言一題コ反詩一山東宋江監收在牢、一節聽候施行とありければ、朱貴見了つて大いに驚き、良久しく只惘然と呆れけり。兩人の小賊ははや戴宗を擡て、人を殺す草房の内に至り、已に衣を剝取んとせし處に、腰の纏に一ツの牌露れ出でしかば、朱貴又これを取つて見るに、牌の上に銀字を雕着ていはいは、江州兩院押牢節級戴宗とありしかば、朱貴小賊らに對していはいは、汝先づ手を動かすことなかれ。我常に軍師吳先生の語り給ふを聞きけるに、江州の神行太保戴宗と云ふ人、軍師とは

交厚き舊友たるとなり。恐らくは此人にてぞ有るべし。然れども此人いかなぞ此の書簡を京に送つて、宋押司を害せんとするや。遮莫天幸ひを賜うて此書簡我手に落ちぬる上は、宋押司の一命先づ恙なかるべし。宜しく解藥を以て彼を甦せ、乃ち事の實否を詳かに問はんとて、頓て小賊に解藥を調合させ、戴宗が口中に灌入れしかば、須臾の間に戴宗再び眉を揚眼を開いて扒起、乃ち朱貴が手に彼書簡を披き拿ぬるをみて大いに呼ばはつて云ふ、汝は誰なれば斯く大膽に蒙汗藥を用ひて我を顛倒させ、刺へ蔡太師が方へ呈する書簡を擅に封を破りしこと、罪まさに死にいたるべし。朱貴大いに冷咲つて云ふ、蔡太師が方へ送る書簡を開きぬるとも、何の利害かあらん。我此處には英雄豪傑充滿して、當朝の太宗皇帝の對手にもならんと欲す。豈肯て其餘の人を恐れんや。戴宗此言を聞いて大いに驚き、乃ち問うて云ひけるは、足下は好き一人の豪傑と覺えたり。願はくは姓名を知らしめ給へ。朱貴が云ふ、我は此所に居住し、専ら世間の善惡を窺知つて、山陣に註進をなす梁山泊の豪傑早地忽律朱貴と云ふ者なり。戴宗が云ふ、足下果して梁山泊の豪傑ならば、吳學究先生を知り給ふや。朱貴が云ふ、吳學究は乃ち是我山陣の軍師と成つて、兵權を掌る。足下いかなぞ吳學究を問ひ給ふや。戴宗が云ふ、吳先生と某とは交り厚き知己なり。朱貴が云ふ、吳先生も常に足下の噂あり。足下は必定江州の節級神行太保戴院長ならん。戴宗が云ふ、某則ち其兩院押牢節級戴宗なり。朱貴が云ふ、向に山東の及時雨宋公明江州に流されし時、我山陣に至つて、諸の豪傑と參會ありけるに、其節軍師

吳學究一封の書簡を足下に寄せて、宋公明のことを頼れしに、足下何ゆる今却つて宋押司を害せんと欲ふや。戴宗が云ふ、宋押司と我とは今同胞の兄弟よりも猶親し。彼今誤て反詩を吟じたる故、遂に擒となつて入牢せり。我彼を救はんとすれども、計を行ふべきものなし。是に依つて我今京上に何とぞ方便を盡し、宋公明を救はんと欲す。我豈敢て彼が性命を害せんや。朱貴がいはいく、足下猶詐り給は、此書簡を見給へと、乃ち蔡九知府が書簡を戴宗に見せしめければ、戴宗これを見て忽然として大いに驚き、即ち宋江が始て江州に至りし時の次第、吳學究の書簡を得たること、此度宋江潯陽樓の上にて、酔後反詩を吟じたる始末まで、一々詳かに語りしかば、朱貴是を聞いて云ひけるは、此上は院長自ら山陣に上つて、諸の頭領と共に良計を商議して、宋公明の性命を救ひ給へとて、先づ酒食を具へて戴宗を管待頓て蘆葦の内へ響矢を射入れしかば、小賊ら相圖の響を聞き、即ち一艘の快船を漕いで朱貴が亭下に至りし處に、朱貴遂に戴宗と共に船に乗り、直ちに金沙灘に至つて岸に上り、朱貴自ら戴宗を導いて陣前に至りしかば、吳用は戴宗が消息を聞いて、忙はしく關前に出て相迎へ、互に禮を行ひ了て、吳用先づ戴宗に對して云ひけるは、今日は何の風院長を吹て此所に至らしめけるや。先づ大陣の内に入り給ひて、諸の頭領に相見え給へとて、遂に院長を引いて陣中に入り、則ち諸の頭領を請うて戴宗に遇しめ、各座已に定まりける處に、朱貴頓て宋公明が反詩を吟じ、今牢中に在ること、戴宗が京に上らんとして、此處を通りし來歴、詳かに語り聞こえければ、晁蓋其

外大いに驚き、猶戴宗に問ひ尋ね、戴宗有りし次第備細に語りたるに、晁蓋已にかくあらば、諸の頭領を請うて人馬を催さしめ、急に江州を攻め、宋江を救はずんば、押司が命は今風前の燈のごとくにあらんと議しければ、軍師吳用これを諫て云ふ、此事不可なり。いかんぞなれば、此所より江州へは路甚遠し。若し人馬を起して江州へ攻め行かば、此事はや江州にもれ聞え、宋公明の性命は忽ち知府が手に害せらるべし。此事力を以て敵すべからず、唯智を以てすべし。某不才なりといへども、一つの計あり。唯戴院長の身の上にて、宋押司を救ふべし。晁蓋が云ふ、願はくは軍師の良策を聞かん。吳學究が云ふ、今蔡九知府戴院長を京へ遣はし、書簡を蔡太師に送つて、返簡を求めんと欲す。是則ち我輩が計を行ふべき本なり。先宜しく蔡太師が返簡を假て一封の書札を修へ、乃ち其文に云ひ遣はすべきは、罪人宋江が事必ず其地に於て罪を行ふことなけれ。唯急に彼を京に送るべし。然らば此地に於て罪を委細に拷問し、宜しく決斷を遂げ、斬罪に行ひ即ち首を梟して衆に示し、速に童子らが謠言を絶すべしと誑かば、蔡九知府必ずこれを信じて、宋公明を都に送ることあらん。然らば官軍等宋押司を監押して、我が山の下を過ん。我が輩預じめ先づ人を山下に馳せて、宋公明を奪取らしめん。此謀計はいかん。晁蓋が云ふ、軍師の計最も善なり。但萬一此所を過らすんば、又却つて大事を誤つことあらん。公孫勝が云く、これ何ぞ難きとせん。我が輩預じめ先づ人を遠近に馳せて、其過る道を窺しめ、何れの路にてなりとも、是非々々宋押司を奪ひ取らんに、何の難きことあらん。

晁蓋が云く、賢弟等の計策極めて當れりとて大いに悦びけり。此段事長ければ、次卷に推わたりて見るべし。

四編卷之七

其下

晁天王軍師ならびに公孫勝が計略を可なりとして、又想道蔡太師が返簡を似せんに、此人は高名の能筆なれば、其筆者有まじきこと猶又諸頭領に對し、唯恨らくは蔡太師に似たる筆者あらじと申ける時、吳用が云ふ、某此事已に心中に思量し了ぬ。今天下に専ら行はるゝ處の筆跡は、唯四家の字體のみ、即ち蘇東坡、黃魯直、米元章、蔡太師これを名けて宋朝の四絶と申す。某一人の舊友に、能く諸家の字體を寫す者あり。世の人皆稱して聖手書生と云惜せり。這人原濟州城の秀才にして、姓は蕭名は讓と號す。又能く武藝に達して鎗棒を使ふ。これを用ひば必定能く蔡太師が筆跡を假すべし。しかじ戴院長を頼んで彼が家に至らせ、則ち彼を誑いて云ふべきは、泰安州の岳廟に新たに石碑を建けるに、此碑文を書ん者隣國にこれなし。願くは先生駕を枉てこれを書給はらば、大いなる幸ひならんとて、先五十兩の銀を送つてこれを邀へ來り、其跡に又人を馳て、彼が眷屬を賺し邀へ山陣に引取るべし。然らば彼必ず心を傾けて山陣に足を留め、終に我らが爲に書簡を假しめば、此回の用のみにあらず、大事を成しむること有べし。晁蓋が云ふ、其蕭讓を賺し邀へ得ば書簡を假ることは足べし。猶

又圖書印記を假する人のなきをいかんせん。吳用が云ふ、長兄これを憂へ給ふことなけれ。圖書を假せん人も同じく濟州にあり。即ち姓は金、雙名は大堅と號す。原來圖書を假することの妙手なり。又よく鎗を刺棒を使ふ。彼かの如く圖書玉石を雕るの妙手たるにより、人皆彼を稱し玉臂匠と申す。是又五十兩の銀を送て山陣に迎ふべし。此兩個の人は只這回の用を調ふるのみにあらず、山陣に長く彼等を用ふべき處あり。晁蓋大いに悦んで云ふ、いよく此兩人を得ることあらば、計立處に成就すべしとて、其日は酒宴を設けて戴宗を款待、晚に至つて粧束を調へ、一二百兩の銀を取て包袱に裹み、乃ち又四ツの甲馬を腿に拴つけ、山を下り水を涉て路口に出で、竟に神行の術をなして飛がごとくに跑行き、纔二時計の内に濟州府に至り、即ち聖手書生蕭讓が家に尋行て門外より呼び云ひけるは、蕭先生家に在りや。此時内より一人の秀才出來る。戴宗此秀才を見るに、頭には烏帽を戴き、身には青衫を着し、腰には繡縵を繫び、足には綾鞋を穿き、相貌極めて風雅なり。此秀才已に門外に出でければ、戴宗先問て云く、しらす秀才は蕭先生なるや。秀才答て云ふ、蕭讓とは即ち某がことなり。足下は又何れの所より、何等の事有て來り給ふや。戴宗が云ふ、某は泰安州岳廟より來りし者なり。今岳廟に一ツの石碑を新に建けれども、此碑文を書ん人隣國に覺えなし。願くは先生駕を枉て、これを書給ふものならば、大なる幸ならん。且微薄ながら先五十兩の銀を送り申すとて、則ちこれを與へければ、蕭讓が云ふ、某は只文を做り、字を寫すを善するのみにて、石碑を刻ること能す。須く妙手の刻

匠を求め給は、可ならんや。戴宗が云ふ、刻匠のことは、某別に五十兩の銀を送て、玉臂匠金大堅を頼まんと欲す。望らくは先生吉日を擇給ひて、金大堅と共に駕を移し給へ。蕭讓銀を得て大いによろこび、即ち戴宗と同じく家を出て、金大堅が宿所へと尋ね來り、已に半途に至つ蕭讓忽ち前面を指さして云けるは、對面より來る人、乃ち金大堅なり。戴宗彼來る人を見るに、頭には黒紗の巾を戴き、身には緑紗の衣を着し、人品尤も文雅なり。此時蕭讓金大堅を扯住て、戴宗に見えしめ、乃ち泰安州の岳廟に新に石碑を立てらるゝに依て我が輩兩人を頼み、碑文を書せ碑文を刻しめんとて、各五十兩の銀を送て、我と足下とを岳廟に邀へ給はんとのことなりと、一々詳に語りければ、金大堅これ聞いて大いに悦び、乃ち戴宗を請て酒店に至りし處に、戴宗頼て五十兩の銀を出して、金大堅に送て云けるは、願くは吉日を擇んで、早々駕を移し給へ。蕭讓が云ふ、今明兩日は是吉日なり。然れども今日は先此に在て暫く酒を酌み、明日速に發足すべし。金大堅がいはく、已にかくのごとくんば、大いに可ならんと約を定め、其日は此にて三人酒を酌、遂に盃を收めて酒店を出しかば、金大堅は先旅粧ひを調ふべしとて、宿所へを歸りけり。蕭讓は其夜戴宗を留めて、己が家に歇ましめ、翌日未明に起て、戴宗と共に暫く金大堅が來るを待居ける處に、金大堅はや至りしかば、三人同じく蕭讓が家を出て、濟州城を離れ、纔に十里許馳しに、戴宗彼兩人に對して云ひけるは、兩位の先生は跡より靜に來り給へ。某は先に馳回て諸の人に斯と告、宜しく途中まで出て兩人の先生を相迎は

せ候はんとて、遂に飛がごとく跑行けり。彼兩人の者は自ら包袱を背に擔ひ、漸々末の上刻に至て約莫七十里許過しと思ふ處に、前面呼はる聲有て、四五十人の小賊はせ出で、當先に一人の大將馬を進めて大音あげ、汝兩人何國より何國へ過るや、我今汝兩人を捉へて、其肝を引出し、宜しく是を肴として、三盃を酌んことを思ふとて、已に小賊等に下知して、彼兩人を早く活捕と呼はりけり。此大將は梁山泊の頭領王英なり。蕭讓是を聞忙しく告て云ひけるは、某等兩人は泰安州の岳廟に赴て碑文を書き碑文を彫るの貧窮者共にて、曾て一錠の銀すら携ず、只兩三套の舊衣あるのみなり。王英益怒て、我何ぞ必しも汝等が貧福を論せんや。蕭讓金大堅大に怒り、兩人同じく腰刀を抜て、王英に斬て蒐る。王英鎗を捨て相迎へ、戰已に八九合に及んで王英急に馬を回し逃けるを、兩人は跡を慕うて追行しに、忽ち山の上に金鼓の聲大いに響き、左の方に雲裡金剛宋萬すゝみ出で、右の方には横着天杜遷進み出で、背後には白面郎君鄭天壽進み出で、各三十餘人を引て前後左右を遮り、遂に蕭讓金大堅兩人を捉へ、横に抱り堅に拽き、直に林の内に入て、四人の頭領齊しく兩人の者に對して云けるは、汝兩人宜しく心を安んじ給へ。我輩は是晁天王の命令を受け、則ち汝兩人を捉へて山陣に留んと欲ふのみ、毛頭汝等を害するにあらず。蕭讓等兩人が云ふ、我が輩は唯よく飯を費すのみにして、雞を縛るの力もなし。山陣に留め給ひて何の用にか中らん。杜遷が云ふ、我が山陣の軍師吳學究原來足下兩人とは舊友といひ殊更足下等は武藝の達人たるにより、向に戴宗を足下等の

家に遣はして遊はしめしなり。岳廟と云しは都て詐なるに、宜しく是を曉し給へ。蕭讓金大堅これを聞て大にあきれ、只面を見合すばかりなり。此時四人の頭領兩人の者を引て朱貴が店に至り、頓て酒宴を設けて兩人を款待、其夜遂に導て山陣に至りし處に、晁蓋則ち諸の頭領と俱に、兩人の者を迎て相見え、豊に酒宴を具へて饗應し、晁蓋頓て蔡大師が返簡を假せんと圖ることを語り、山陣に止めければ、兩人齊しく吳學究に對し、某等兩人山陣に安身せば、是大なる福ひなり。然れども各都て妻子あり。いかにぞ能くこれを棄るに忍びんや。吳用が云ふ、足下らこれを憂へ給ふことなかれ。貴族を明日は山陣に遊へ來るべしとて、其夜は各退散しけるが、翌日小賊來つて、蕭讓と金大堅が眷屬どもを、はや遊へ來るよし吳用に告しかば、吳用頓て彼兩人を請て眷族らに遇しめける處に、衆皆大いに悦びいよく心を傾け膽を吐て、山陣に止りけり。吳用又兩人を請うて、蔡大師が返簡并に圖書を假せて、宋公明を救はんことを商議しけるに、兩人齊しく領承して、遂に返簡も圖書も全く調りしかば、則ち返簡を戴宗に與へ、再び江州へ遣しけり。扱晁蓋は諸頭領と共に酒を飲み居ける處に、吳用俄に面色土の如くに成て、阿と一聲叫びしかば、諸頭領大に駭いて其故を問ふ。吳用答て云ふ、這回返簡を假しことは、偏へに宋江を救はんが爲なるに、豈料んや却て宋江と戴宗とを殺すことを做出せり。諸頭領これを聞て駭き性んで、書中に何等の誤在つて斯く云ひ給ふや。吳用が云く、我先に事の忙はしきに紛れ大いなる差ひをなせり。蕭讓が云ふ、某が書ぬる筆跡蔡大師が字體

と同じ。しらすいづれの所に差ありや。金大堅も又問て云ふ、某が雕たる圖書毛頭も誤たず。何を以て大いなる差ありや。吳用が云く、足下ら兩人のなせし處には、少しも差ふ所なければども、我自ら誤つてなせる所ありて然り。一人を助け救はんとて、却て二人を殺す者は、唯我のみとて再三悔で嘆息せり。此誤とは何を云ふや、次を讀て明かならん。

梁山泊の好漢法場を劫す

此時晁蓋等吳用に問うて云く、返簡を假て何等の差ひありしや。吳用答へて、此たび假し圖書の文字は、翰林蔡京と云ふ四字なり。乃ち此圖書宋江戴宗二人を殺すなり。金大堅が云ふ、我毎度蔡太師が書簡并に文章を見たるに、圖書毎々翰林蔡京の四字なり。是何の差ふ所かあらん。吳用が云く、足下等是をしらすや、今江州の蔡九知府は蔡京の子なり。父より子に遺す書翰の上に、いかんぞ諱の字ある圖書を用ひんや。然るに我誤て諱の字ある圖書を用ひぬれば、戴宗必ず知府に疑れ、事竟に露るべし。晁蓋是を聞いて大いに驚き、急に人を馳せて戴宗を呼び回さんと思へども、戴宗は本神行の法をなして、飛ぶがごとくに跑るゆるゑ、はや五百里以上を行きつらん。翅を生じ空を翔らば、呼び回すこと能ふまじとて、各呆れたる斗りなり。吳用が云く、もと我此計は倣まじく思ひけれども、今はいかにせん止ことを得ざるに依つて行はん、其計はかくのごとく如斯と低言しかば、晁蓋大いに悦び、頓て諸頭領に號令を下し、各班束を調へて當日山を下り、水を涉て急に江州を望んで

進發す。扱戴宗は既に江州に至り、直に知府が廳前に出でて返簡を呈しければ、知府是を披見して書面を曉し、則ち二十兩の銀を以て戴宗を賞しけり。戴宗廳前を退出し、牢中に至り、先づ宋江を見て互に悦ぶこと限りなし。扱蔡九知府は急に宋江を都へ送るべしと商議して、囚車等を調へける處に、彼黃文炳伺候せりと告げければ、知府自ら是を迎へて後堂に至り、知府先づ黃文炳に對して云く、足下の吉事近々に至るべし。預じめこれを悦び給へ。黃文炳が云ふ、相公は何を以て吉事の至るを知り給ひぬるや。知府が云く、昨日彼戴宗京より回り、則ち父大師が返簡を携へて來りけるが、彼罪人宋江を近日京に送るべきとのことなり。足下が事も頓て帝に奏聞して、官職を授けんと委細に申來れり。黃文炳が云く、若し果して此のごとくんば、某莫大の福ひなり。然れども只恐らくは尊父太師何ぞ輕々しく某らがことを早速奏聞あらんや。知府が云く、足下尙これを疑はば、父が返簡を見て我が謬りなきことを知り給へとて、即ち彼返簡を取出し、これを見せしめければ、黃文炳返簡を接へて、始終りを見畢り、又圖書をみることに良久しうして、忽ち頭を搖て云ひけるは、此返簡恐らくは假せならん。知府が云く、何を以て足下これを假せと云ふや。黃文炳が云く、尊父大師常に書簡を寄せ給ふ時此圖書を用ひ給ふや。知府が云く、常に寄せ給ふ書簡の圖書はこれにあらず、此般はいかなるゆるゑにや、此の圖書を用ひ給ひぬ。黃文炳が云く、某不才たりといへども、此書簡を見るに、彌假たるものに疑ひなし。其故いかんとなれば、翰林蔡京と云ふ文字ある圖書は、尊父昔日翰林院學士た

りし時こそ、是を用ひ給ひたれ。今直ちに太師丞相に陸り給ひても、同じく昔日の圖書を用ひ給はんや。殊更親の方より子に送る書簡の上に、いかに諱の字ある圖書を用ひんや。尊太師は原來天下の書を觀盡し給ひて、博識大才の學者なるに、いづくんぞ敢てかくのごとき差ひをなし給はんや。相公もし某が言を信じ給はずんば、彼戴宗を呼んで委しく問ひ給ひて、東京の動靜を語らしめて聞き給へ。若し彼が詞に相違のことあらば、此書則ち眞の返簡にあらじ。知府が云く、彼戴宗は未だ東京に上らざる者なれば只一たび問はば、事の虚實分明に知れんとて、乃ち黄文炳を屏風の背後に藏し置き、頓て一人の下官を戴宗が家に馳せにけり。扱戴宗は梁山泊にて這回返簡を假たることを、一々詳かに宗江に低言しかば、宋江は心中に是を悦ぶこと限りなし。此日は戴宗一人の友と酒を酌んで居ける處に、俄に下官來つて知府相公院長を召し給ふと告げて、遂に戴宗を誘引して廳前に至りしかば、知府則ち問うて云く、汝前日東京に至りし時は、いづれの門より城中に入りぬるや。戴宗答へて云く、某前日東京に至りし時は、夜中にてありしゆゑ、何れの門と云ふ名を知らざりけり。知府が云く、我が父太師が家にては、誰人出て汝を迎へぬるや。戴宗が云く、某太師の家に至りぬる時は、一人の把門出て某を迎へ、則ち籠と書簡を取つて内に入る。又少頃して出來り、遂に某を客店に導て歇しめぬ。翌日未明に某又太師府の門前に至つて伺ひしかば、彼把門則ち返簡を持來つて、某に付與ぬ。某日限を誤らんことを恐れ、其日其ま、東京を發足せり。知府又問うて云く、汝が對面したる把門は、年の

此は幾何歳に思はれ、其相貌模様はいかぬ。戴宗が云く、某府裡に至りし時は、已に夜中にして翌日發足しぬる時は、五更の左側ゆゑ、天色猶暗かりしゆゑ、彼把門は分明には見届ざりしかども、大槪是を見るに、中等の身材にして少し鬚ありぬ。知府これを聞き、大いに怒り罵つて云く、汝何ぞ亂りの言を云ふや。其上到着發足、夜中又は五更と偏に暗に託け、且我父太師府の把門は、王公と云ふものなりしかども、前年病死しぬるゆゑ、又其悴を以て門を守らしむ。此者いまだ二十に過ぎざるに、いかんぞはやく鬚あらんや。殊に門を守る者、堂内に進み入ること能はず。凡そ書簡等の取次は、格別に又其役あつてこれを承る。這回の書簡は大事を云ひ遣はしければ、別して諸役人これを聞き、汝を廳前に呼び入れ、詳かに其故をも問ふべきことなり。然るに汝詐を以て我を誑んとするやと、遂に左右の軍卒に命じて、戴宗を縛させれば、戴宗大いに驚きていはく、某に何の罪ありや。某今答ふる所唯有りし儘なり、聊偽りを申立てず。殊さら某急に發足せしゆゑにや、曾て一個の役人も出候はず、何ぞ相公を欺くこと候はん。知府益怒て云く、汝奸賊打たずんば、いかにぞ敢て白狀せんやとて、已に左右を顧みて、彼賊を痛く策うてと呼はりしかば、諸の軍卒とも心中には戴宗を憐みけれども、止事を得ず戴宗を拖り倒し、頓て棒を擧げて散々に打ちし處に、皮開け肉綻び血は滾々と流れ全身都て紅に染にけり。戴宗今は堪がたく、則ち白狀して云ひけるは、某向に梁山泊の下を過ぎし處に、一夥の強賊出でて某を生捕、彼の書簡并に禮物等盡奪取つて、某が一命ばかりを饒しぬれど

も、某再び歸郷して相公に見えがたきことを察し、則ち山陣に於て再三死を乞ひしかども、彼敢て殺さずして、却つて此返簡を假て某に與へしゆるゑ、某先づ當座の罪を脱れんと欲し、則ち是を携へ來て、相公を誑き奉りぬ。知府が云く、汝分明に梁山泊の強盜等と通同して、我が京へ送る禮物を奪ひ取り、いかんぞこれらの白狀のみにて、罪を支吾んとするや。再び汝を打たずんば有るべからずとて、又軍卒らに命じ數十棒打たしめけれども、白狀の言始終同じかりしかば、知府又牢子らに仰せ、先づ戴宗を牢中へ遣はしけり。扱知府は黃文炳を謝して云く、足下の高見にあらずんば、すでに彼が爲に誑かれて大事を誤つべきに、幸ひ足下の教に因つて、是れを曉せりとて悦ぶこと極りなし。黃文炳が云く、某かの戴宗が動靜をみるに、梁山泊の強盜等と通同して、叛反を企と圖るに疑ひなし。若しこれを急に殺し給はずんば、必ず後來の患たらん。知府宋江の反賊とともに同罪に決斷して先づ當地に於てこれを殺し、其後表を京に獻りて、天子に奏聞せば可ならんや。黃文炳が云く、相公の高論極めて明なり。もしかくのごとく急に斬罪を行ひ給はば、梁山泊の盜賊らに牢を劫はるゝことあるまじ。しからば帝も必ず其功を欲聞有つて、これを恩賞し給ふべし。知府これを聞いて大いに悦び、一向黃文炳が智見を稱しければ、黃文炳も共に悦んで、遂に無爲軍へぞ歸りけり。翌日蔡九知府黃孔目に仰せ、明日宋江と戴宗とを街の上に於て、これを斷罪すべき間其用意を調ふべしと、嚴に命じければ、黃孔目はもと戴宗とは、交り厚き知己たるによつて、心中に甚だこれを悲しみ、乃ち知府

に告げて云ひけるは、明日は國家の忌日、明後日は又七月十五日中元の節なれば、此兩日の内斬罪を延し給へと諫めしに知府其議に同じけり。此時梁山泊の豪傑等は吳用が謀を受け、則ち衆皆々山を下りて、江州へ馳せけれども、此日は猶道中に在つて江州には至らざりし處に、今黃孔目知府に告げて斬罪の日を延ばしたるは、天宋江等兩人を救ひたまふ時會計せり。蔡九知府は黃孔目が言を容ひ、斬罪の日を七月十七日に定め、即ち街の上の斬場の土壇を設けしめ、已に其日に至りしかば、土兵軍卒五百餘人を催し、知府親自黃孔目と同じく、宋江戴宗兩人を監押して、已に斬場へぞ引かせけり。賤雲霞のごとくに集つてこれを見物し、宋江戴宗兩人を深く憐む者多かりけり。宋江は前に引かれ戴宗は後へに引かれ、互に聲をもなさずして只顧頭を低たるばかりなり。五百餘人の土兵ども、頓て兩人の者を引きすすゑ、先づ宋江を南面に坐せしめ、戴宗を北面に坐せしめ、緊く劍戟を建並べて、斬場の四方を諸軍卒に守らせ、只午の上刻を待ちて首を刎べしとて、劊子已に背後に繞り、明晃々する刀日に映じて控へけり。此時諸の見物人面を仰で牌の上に寫したる文字をみるに、其文に云ふ、江州府の狂人一名は宋江と云ふ者、向に反詩を吟じて壁の上に書き、梁山泊の強盜等と通同して、謀反を企んと圖りぬるゆゑ、今日これを斬罪に行ふ。又犯人一名は戴宗と云ふ者、宋江が爲に私に梁山泊に消息を通じて謀反を助けんとせしゆゑ、同じく斬罪に行ふ者なりと、明らかに書着けぬ。斯る所に斬場の東の隅より、一夥の漢子ども諸人を推開て揆入しかば、諸人は是をみるに、乃ち蛇をばらして

を賣るものどもなり。又西の隅より同じく一夥の漢子共諸人を推分揆入しかば、諸人これをみるに、乃ち棒を使うて、藥を賣者どもなり。士兵軍卒此體を見て大に罵つて云ひけるは、汝等藥賣いかんぞ。撞に人を推開て揆入や、必ず騷動すること勿れ。彼藥賣の漢子共が云く、汝士兵等何ぞかくのごとき事を云ふや。縦ひ京に於て天子の人を殺し給ふにも、又肯て人を放ち入れて是を看せしめ給ふなり。汝此小州にて只兩個の罪人を殺すのみにして、見物を制するはいかん。我が輩近く進み入つてこれをみるとも、何の妨かあらんとて、一向爭論しける處に、監斬官これを聞いて、士兵に命じて呼ばはり云ひけるは、其者共一人も近く進ましむることなかれと、未だ云ひも了らざるに、又南の隅より一夥の人、擔を荷うて進み入りしかば、軍士らこれを遮つていひけるは、汝等擔を荷つて、斬場近く進み來るはいかん。速かに外面に走り出よ。彼者どもが云く、我輩は皆知府相公の家に擔を運ぶ者共なり。汝等いかんぞこれを攫んや。士兵等が云ふ、汝ら果して知府相公の家に出入する者共ならば、此處を過らず、別の路を過るべしと、一向問答休ざりし所に、北の隅より又一夥の旅人車を推して揆入しかば、士兵共罵つて云ふ、汝旅客ら車を推して何れの所に往かんとするや。旅客答へて云ふ、我輩は皆道を急ぐ者共なり。此所を放ちて過らしめ給へ。士兵等が云ふ、汝若し路を急ぐ者ならば別の道を求めて過るべしとて、再三再四これを阻當しかども、彼旅客耳にも聞き入れざれば、四方に制し罵り、騷動切にして蔡九知府もこれを禁ずること能はざりけり。已にしてはや午の上刻に至りしか

ば、軍卒ら先づ監斬官に告げ、宋江戴宗兩人が首枷を除き、劊子はや背後に轉りて、刀を打ちかけんとせし處に、一人の大漢子双の手に二ツの斧を揮ひ、恰も奔雷のごとく吼て群人の内より跳り出で、急に二人の劊子を砍倒し、直ちに監斬官を望んで、馬の前に砍てかゝりしかば、諸の士兵どもこれを見て、急に劍戟を揮て支んとせしかども、彼大漢子に砍拂はれ、蔡九知府も這々命を遁れ、逃げ去りけり。斯る所に、東の隅より出し蛇を使うて藥を賣る漢子共、盡く刀を揮て斬場の内に亂れ入り、士兵等を散々に砍まくる。又西の隅に控たる棒を使うて藥を賣る漢子共、同じく刀を拔持、一齊に咄と喊き叫んで斬廻る。南の隅より擔を荷うて入來りたる漢子共、各 肩擔を輪して、軍卒等を前後左右に打ち伏せけり。又北の隅より車を推して來りし旅客ども、車を以て士兵らが逃げんとするを遮り、其内二人の漢子一同に進み入り、一人は宋江を背ひ、又一人は戴宗を擔げ、其餘の旅客は、各弓箭を取出し、軍卒等を射殺し、四方同時に劍戟起りて士兵共を傷ふこと許多なり。彼車を推來りつる旅客は、乃ち晁蓋、花榮、呂方、郭盛等なり。彼棒を使うて藥を賣る漢子どもは乃ち燕順、劉唐、杜遷、宋萬なり。又擔を挑て來りたる漢子共は、則ち朱貴、王英、鄭天壽、石勇等なり。彼蛇を使ひ藥を賣る漢子共は、是玩小二、阮小五、阮小七、白勝等なり。都て梁山泊の豪傑十七人百餘人の小賊を引いて馳來り、斯猛威を振て士兵共を追散したり。彼二ツの斧を持ちたる大漢子は、猶四面八方に跑て軍卒等を多く砍倒す、此漢子が功第一なり。晁蓋未だ此漢子を識認すして想ひけるは、彼は何者なれ

ば、斯比類なき働きをなし、武勇を現すやと良久しうしてのち、忽ち想ひ着きけるは、嚮に戴宗梁山泊にて黒旋風李逵とやらん云ふ豪傑、よくふたつの手に双の斧をつかひ、萬夫不當の勇力あり。此者宋江を愛敬すること師父のごとしと語りけるが、必定此漢子がことならめとて、晁蓋高聲に呼ばはつて云ひけるは、前面の豪傑は黒旋風李逵にてはあらずや。彼大漢子は聞きけれども敢て答へず、只管斧を輪して土兵共を四方に追ちらす。晁蓋此時宋江と戴宗とを背たる小賊に下知して、彼漢子がしりへに随はしめ、直ちに十方街に至つて四方を顧るに、土兵軍卒其數を知らず斬殺され、尸は横りて野に遍く、血は流れて渠をなせり。諸の頭領ら都て彼大漢子が後に跟て、盡く城外に斬つて出でければ、江州の軍民百姓此勢ひを見て大いに恐れ、近づき進まんとする者一人もなかりける。彼大漢子遂に江邊に至つて許多の百姓等を砍伏しかば、晁蓋再應これを制しけれども、彼漢子曾て耳にも聞き入れず、ます／＼斧を輪して虎の勇をなしにけり。漸々五七里ばかりに至つて前面を望み見るに、洶洶たる大江のみ有つて、只一筋の早路もなかりけり。晁蓋此所に路なきを見て、大いに憂へし處に、彼大漢子忽ち呼ばはつて云ひけるは、長兄必ず憂へ給ふことなけれ、先づ宋押司と戴院長とを、廟の内へ休息なさしめ給へと叫び、當先に進みけり。

白龍廟に英雄小く義に聚る

諸の豪傑盡く廟前に至つてこれを見るに、廟門緊く關したりけるを、彼大漢子斧を以て廟門を打ち

開きしかば、いづれも廟中に入つて、前面の額をみるに四ツの金字あり。乃ち白龍神廟と云ふ文字なり。此時小賊等宋江と戴宗とを廟の内に卸し休ける處に、宋江方に眼を開きて晁蓋等衆人を見て覺す兩眼に涙を酒で云ひけるは、晁天王これは夢中の參會にはあらずや。晁蓋が云ふ、長兄さきに山陣に留り給はざりしゆゑ、今日の苦しみをうけ給ひぬ。寔に危かりし事なりとて、各息を繼にけり。晁蓋又宋江に問うて云ひけるは、彼大漢子は誰なるや。宋江が云ふ、彼は則ち黒旋風李逵と云ふものなり。彼向にも再三我を助け、牢中を逃げ出でよと諫めしかども、我竟に脱れがたきことを察し、彼が諫を用ひざりけり。晁蓋が云ふ、彼が働きたる諸人に勝れて其功第一なり。誠によき一人の豪傑かなと稱しけり。宋江又即ち李逵に對して云ひけるは、汝早く我が義兄に見えんや。李逵これを聞いて忙はしく晁蓋を拜して云ひけるは、長兄、必ず遲拜の罪を赦し給へとて、又諸頭領に對面しける處に、朱貴と李逵とは本同郷なりしかば、兩人別してこれを悦びけり。花榮が云ふ、某ら已に此所に至り、大江に前路を攔られ、しかも一艘の船もあらざれば、江を渡らん方便なし。若し官軍大勢後へに暮うて追來らば、いかんぞよくこれを迎へ、敵し戦はんや。李逵が云ふ、諸長兄少しもこれを憂へ給ふことなかれ。若し軍卒ら再び來らば、我又二ツの斧を振て、一時に斬拂ひ直ちに城中に跑入り、かの賊官蔡九知府を捉へて首を刎べし。此時戴宗漸々眼を開き李逵に對して云ひけるは、賢弟必ず卒爾のことをなすことなけれ。城兵猶五七千もあるべきに、若し勢ひに乘じ再び城内に欲入ば、必定誤りある

べきぞ。阮小七が云ふ、對岸に數艘の船遙にみゆれば、某ら兄弟三人水を越て彼所にいたり、早々舟を奪ひ取り、諸人を渡すべし。晁蓋が云ふ、此計究て上策たらん。速かに船を奪ひ取來れと命じければ、三阮兄弟頓て衣服を脱て水中に跳入、約莫半里程至り、五艘奪ひ來れり。又皆上流をみるに、三艘の快船飛ぶがごとくに漕來る。舟の上には各十餘人の漢子ども打乗て毎手に軍器を持ちて、早近々と漕寄しかば、諸人これをみて大いに驚きぬ。宋江は獨り自ら歎息して云く、我が命必ず此所にて終るべしとて、廟の前に走り出で、彼舟を望み見るに、まづ先に進みし一艘の舟の上に、一人の豪傑手に鎗を撚つて、己に岸邊に漕至る。宋江此漢子等をよくくみるに、則ち浪裡白跳張順なり。張順乃ち船の頭に躍出でて、大音聲に呼ばはりけるは、汝等は何者なれば、妄りに白龍廟の内に在つて衆を聚るや。宋江急に呼ばはつて云く、賢弟宜しく宋江を救はんや。張順等これを聞いて大いに悦び、三艘の快船齊しく岸に搖着ければ、宋江喜悅斜ならず、これをみるに、一艘の舟よりは、張順自ら十餘人の漢子を引いて岸に上る。又一艘の舟よりは、張横みづから穆弘、穆春、薛永等と共に、十餘人の漢子を引いて岸に上る。また一艘の舟よりは、李俊自ら李立、童威、童猛等と共に十餘人の漢子を引いて岸に上る。張順先づ天に悦び地に喜んで、宋江を拜して云ひけるは、長兄入牢し給ひて以來、某坐立安んぜず。何とぞ長兄を救はんと圖りしかども、又良計あらず。益憂へぬる處に、戴院長は同じく擒となり給ひ、李長兄には又會て遇す。某一人が力の及ぶ所にあらざりしゆゑ、急に馳て兄

張横に斯くと告げ、即ち穆弘が家に於て、人數を聚め今日直ちに江州城に攻入、長兄戴院長を救はんと圖りけるに、豈知らんや、はや人あつて長兄を救ひ出し、想はず此處にて恙なき體を見せしめ給ふこと、莫大の幸ひなり。扱此幾ばくの豪傑は、梁山泊の晁天王にはあらずやいかん。宋江答へて、彼座上に居給ふは、梁山泊の主晁天王なり。其の外總て山陣の頭領なり。各相見し給へとて、張順ら九人、晁蓋等十七人、宋江戴宗李逵三人、都て二十九人、衆皆白龍廟に入つて參會す。是を名づけて白龍廟小聚會とはいふなり。此時諸の頭領一禮をなして相見し、坐已に定まりたる處に、從へ來りし小賊ら、忙はしく廟中に入つて報じけるは、江州城より若干の軍馬金鼓を鳴らし関を作つて馳せ出で、旌旗日を蔽ひ、劔戟麻のごとくに、はや近々と寄來りぬ。李逵是を聞いて大いに怒り、二ツの斧を双の手に持ちて當先に進みしかば、晁蓋諸人に下知し、李逵を助けて、一戦をなせと呼ははりし處に、諸人一度に軍器を揮馳出けり。官軍すべて五七十喊き叫んで斬てかゝるを、李逵怒つて大勢に打ち向ふ。其背後には花榮、黃信、呂方、郭盛の四將ひとしく猛威をふるつて馳着る。花榮敵軍をみるに、悉く長柄の鎗を持ち李逵一人を目がけ進みしかば、花榮急に弓矢打搭へ、満月のごとく拽撓めて漂と放てば、當先にすゝみたる敵の勇士を、馬より下に射落しければ、官軍ども是を見て大いに驚き、各先を争ひ逃散んとせし處に、梁山泊の豪傑ら四方より夾み撃しかば、官軍多く討れ潰亂れ鋒を倒にして盡く逃げ走るを、梁山泊の豪傑らは益勢ひに乗じて追撃し、直ちに江州の城下に至

りし處、城中より矢石雨のごとく飛ばせ、急に城門を開きしかば、敗軍らは這々城中に逃げ入りけり。こゝに於て花榮らは再び李逵を引いて、白龍廟に馳回りぬ。

宋江智をもつて無爲軍を取

晁蓋諸人に下知し、衆皆船に乘らしめ、則ち順風に帆を揚げ、直ちに穆弘が館を望んで走りしかば、暫時の間に岸に着、諸豪傑各岸に登つて、遂に穆弘が家に立ちよりし處に、穆太公自ら出でて相迎へ、頓て酒宴を設けて諸豪傑を饗應けり。此時晁蓋が云く、張順ら若し舟を以て迎はずんば、我が輩殆ど危かるべし。宋江が云く、某と戴院長とは何の幸ひにや、長兄らの爲に萬死の内に於て一生を得ぬ。若し然らずんば、非命の死を何ぞ避得ん。今日の恩は滄海より深し、いかにぞよく是を報ふべき。猶只恨らくは、彼黃文炳我とは原より冤も仇もなきに、再三我を害せんと計りしこと、遺憾骨髓に徹しぬ。我若し此仇を報せずんば、あによく寸志を安んせんや。願はくは諸豪傑我爲に無爲軍を攻めて、黃文炳を活捉、我が此恨を雪がしめ給へ。晁蓋が云く、我輩斯くて在る上は、彼を活捉んこと掌を反すよりも易し。然れども、彼賊はや必定此騷動を聞いて嚴く備を設けたらん。しかじ先づ山陣に回つて、軍師吳學究并に公孫勝、林冲、秦明等とともに商議し、再び大軍を引いて彼賊を活捉ん。此度は先づ急に梁山泊に歸りて先づ宜しく休息を遂給へ。宋江が云く、若し直ちに山陣に回らば重ねて來らんこと難かるべし。其ゆゑは第一山遙に路遠し。第二江州に公文を開き行ひ多く人馬を

備へ防ぎを堅固にすべし。然らば却て彼賊を捉んこと易からじ。只能く此便機に乗じて手を下さば、立處に彼を捉ふべし。花榮が云く、宋長兄の言尤可なり。若し無爲軍の路徑を識人あらば、先づこれを城中に遣はし、彼が住所をも見届しめ、其後馳せ向つて手を下さば、何の苦もなく活捉べし。只恨らくは彼地の案内を知る人あるまじ。薛永聞きもあへず、進み出て云ひけるは、某天下を繞て所々の路徑をよく知る内にも、無爲軍就中某が熟路にして、其案内を詳かに知りぬ。望むらくは某馳せて動靜を伺ふべきや。宋江大いに悦んで云く、賢弟肯て行き給はば、我心安んずべし。薛永其日衆人に別れて獨り自ら無爲軍を望んで馳せ行きけり。宋江は穆弘が家に逗留して已に諸豪傑と商議して無爲軍を攻むる用意を催しけり。扱薛永は遂に無爲軍に至つて、第五日の午の上剋に再び穆弘が家に回り、即ち一個の人を誘引して晁蓋宋江に見えしむ。宋江先づ問うて云く、此豪傑は誰なるぞや。薛永答へて云く、這人姓は侯名は健と號して本洪都の人なり。當世第一裁縫の上手にて、尤も能く針を飛ばせ線を走らしむ。況んや鎗棒をも能く使ふ。乃ち某が門弟なり。彼原來身體瘦たるに依つて、人皆通臂猿侯健と呼べり。則ち無爲軍の黃文炳が家に央れて衣服を縫て在りしを、誘引して此所に至れり。宋江大いに悦び、即ち江州の消息并に無爲軍の路徑を問ひければ、薛永答へていはく、今蔡九知府我輩に討れたる官軍を記したりけるに、五百有餘人にして、疵を被りし軍卒は其數をしらすとなり。是に因つてはや使者を都に馳せて、此ことを朝廷に奏問し、城門は日中後に關し、出入を

緊しく査め、用心尋常に異なり。長兄を害せんと計りしことは、もと蔡九知府これを欲せざりしかども、彼黄文炳再三頻りに知府を諫めて、斯くのごときに至らしめぬ。今江州城の軍民らは、梁山泊の豪傑再び來つて、江州を犯す事もやあらんとて、各恐れざるは一人もなし。某又無爲軍に至り、則ち黄文炳が家の前に徘徊して、動靜を問窺つて居ける所に、此侯健想はず黄文炳が家より出でし故、則ち此度のことを告げて、黄文炳が消息を詳びらかに問ひ候なり。宋江大いによろこび、則ち又侯健に對して黄文炳がことを問ひければ、侯健答へていはく、彼に同胞の兄黄文輝と云ふ者あり。此人は常に善事を好み、あるひは橋を修理し路を造り補ひ、あるひは貧きを扶持し、困るを救濟専らよく仁慈を行ふをもつて、人皆彼を稱して黄老佛と綽名せり。又彼弟黄文炳は唯人を害することを好み、おのれに勝たる者を妬み、己に劣たる者を傷ひ専ら悪事を行ふ。この故に人皆彼を稱して黄蜂刺と綽名せり。前日黄文炳知府を諫めて、押司を害せんと圖りぬることを、兄黄文輝是を聞いて大いに憂ひ、必らず報いあるべしと悲みける。黄文炳果して自ら禍を招ぬ。此兩日は江州の貴賤都て押司の事のみ沙汰して、衆皆恐れけるゆゑ、黄文炳これを聞いて、いよく心中に翼れ慄き、昨夜江州に赴いて蔡九知府を訪ひけるが、何等のことを議するにや、未だ家に回らざるとなり。宋江此時諸頭領に向ひ云けるは、黄文炳が動靜已に聞き知りぬ。いよく各位我が爲に、彼を殺して仇を報じ給はるべきや。諸豪傑一同に答へて云ひけるは、某ら死を捨て馳せ向ひ、終ひに黄文炳を殺して、長兄の仇を

報じ冤を雪ぐべし。宋江又云く、無爲軍の百姓らは我に仇をなさざりし者なれば、必ず一人も害すべからず。又黄文炳が兄黄文輝は、専ら仁徳を行ふ人なれば、必ずこれを傷ふべからず。若しこれを傷ふことあらば、天下の人皆我輩が不仁なることを罵るべし。若し無爲軍に至りなば、黄文炳が家内の輩より外一個の人をも害し傷ふことあるべからず。今彼所に馳せ行かんには、我一ツの計あり。諸頭領我がためにこれを行ひ給へ。豪傑等答へて云く、長兄すでに計あらば、速かにこれを示し給へ。宋江が云ふ五十束の葦を五艘の大船に積み、張横、三阮、童威らを乗らしめ、又二艘の小船に李俊、張順らを乗らしめて、計かくのごとく行はし可ならん。諸豪傑これ聞いてしかりと同じければ、宋江又侯健、薛永、白勝らに計を授け、無爲軍の城中に遣はして、三更の時に計を行はしめ、又石勇、杜遷を城門の左に伏せ置きて火の起るを相圖と定めて、計を行はしめ、事已に全く調りしかば、諸の豪傑頓て粧束を改め、各身には軍器を帶し、先づ晁蓋、宋江、花榮らは童威が船に乗り、燕順、王英、鄭天壽らば張横が船に乗り、劉唐、黄信らは阮小二が船に乗り、呂方、郭盛、李立等は阮小五が船に乗り、穆春、穆弘、李逵らは阮小七が船に乗り、李俊、張順兩人は只江面に往き來して救應をなさしめ、朱貴、宋萬は穆太公が館に留めて、江州の消息を聞かしめ、分撥已に定りしかば、其夜五艘の舟一齊に搖出し、逕に無爲軍を望んで進み來る。此時七月の末にて、夜涼しく風靜に月白く江清く、水の影山の光り上下一やうの碧を見る。已にして初更の前後に、大小の船盡く無

爲軍の江中に入つて岸邊に至り、蘆葦深き所を擇んで舟を一行に繋ぎし處に、童猛は哨のため獨り快舟を漕いで先づ城下に至りけるが、此時忙はしく船を回して、再び岸邊に來り、則ち報じて云ひけるは、城内には人音靜にして、何の用意もなし。宜しく速かに計を行ひ給へ。宋江これを聞いて大いに悦び、則ち諸人に下知して、船の上に積し蘆葦を都て岸の上に運ばしめける時、一更の左側なり。宋江又張横、三阮、兩童らを船に留めて、賢弟ら六人は宜しく船を守り、城中に火の手上るを看なば早速岸に登つて我輩を迎べしと、約を定めしかば、其餘の頭領は各手中に軍器を拿、城邊に至つて城を望み見るに、白勝已に此所に在つて、諸人に對して云ひけるは、對面に露はれみゆる大家は則ち黃文炳が居宅なり。宋江問うて云く、薛永、侯健は何れの所に有るや。白勝が云く、彼の兩人は黃文炳が宅へ忍び入らんとて、はや行きけるが、只長兄の至り給ふを待ちて、計を行はんと欲す。宋江又問うて云く、汝は石勇、杜遷には遇はざりしや。白勝が云く、彼の兩人は城門の邊に在つて相候ふ。宋江是を聞いて、則ち諸の豪傑と共に城中に忍び入り、直ちに黃文炳が家の前に至りし處に、侯健已に簷の下に在りしかば、宋江近く呼んで低言けるは、汝急に菜園の門を開いて、軍士を入らしめ、宜しく蘆葦等を其内に積み上げさせ、薛永に火を求めしめ蘆葦に移し、則ち黃文炳が門を敲て、隣家に出火ありと呼ははるべし。彼れ若し駭いて門を開かば、我れ自ら計を行ふべしとて、豪傑らを分け遣はし左右を守らしめければ、侯健ははや去つて菜園の門を開き、軍士らを入れしめ、蘆葦を其

内に高く積み上げ、則ち薛永に火を放させ、己れは黃文炳が門を敲いて、大音聲に呼ばはりけるは、隣家に出火せり、早く門を開いて家財等を運び搬させ給へと、云ひも終らざるに、家内の男女はや火の光りを見て、大いに駭き慌て立ち出で、門を開きける所に、晁蓋宋江ら喊き叫んで家内に斬つて入りしかば、諸の豪傑ども相續いて斬つて入り、一人をみれば一人を殺し二人に遇へば二人を殺し、黃文炳が眷屬すべて四五十、暫時の間に斬り盡くしけり。然れども獨り黃文炳は見えざりけり。諸の豪傑ども家内を搜し、金銀珠玉盡くこれを取り、一齊に喊の聲を揚げ城上を望んで馳せ來る。扱石勇杜遷兩人は火の起りたるを見て、各刀を揮うて城門を守る軍士を斬殺し、また前後を顧て猶人も有るか伺ひける所に、當地の百姓ら毎手に水桶梯子等を持ちて火を救はんと跑來る、騷動大方ならざりけり。黃文炳が倅行は次巻を見て知るべし。

按ずるに、此巻に蕭讓金大堅を誑く詞に、岳廟と云ふはいにしへの聖王天下の鎮守たるべき山々、齊の國の泰山をはじめ、東岳西岳南岳北岳中岳の五ツを定め、天子自ら其地に臨んで旅をなす。此五岳は道隔りたる故、後世には五所の靈を一所に封じ入、勸請して諸州諸縣に有つて岳廟と稱す。則ち是山の神なり。又白龍神の廟は大江大川の水邊に水神の廟を勸請せしなり。又論者の云、戴宗を糺問する蔡九知府が詞に、父太師が家の門者を問うて、王公と云ふ者死し、其子を又門者となして未だ年若なるに、いかに髪あらんと云ふ。其趣き小身者の屋鋪か寺院の把門の體に

思はる。蔡太師は宋の宰相なれば、日本に比せば何れ百餘萬石の分限なるべし。通鑑の類に出づる所、其外大臣の身上の趣中々輕少のことにあらず。然るに水滸傳は支那人の作に有りながら、かかる不相當のことに在るや。宰相の把門ならば大勢代るべく勤むべきことなり。又黃文炳を亡さんとて、宋江が軍配に無爲軍の庶民に罪なければ、一人も傷ふまじきとは、眞に豪傑の指揮と云べし。然るに霹靂火秦明を清風山に留めんとて、餘多の罪なき良民を屠り、秦明が眷屬を殺させしはいかなる不仁の計らひぞや。

四編卷之八

張順黃文炳を活捉

宋江が計圖に當り、黃文炳が一家を斬盡し、放し火は熾に四方に延るゆゑ、百姓駢集り火を救はんとする時、石勇杜遷大に呼つて、汝百姓ら無益の所に來ることなかれ、我輩梁山泊の豪傑數千人來て黃文炳一家を殺し、宋江戴宗が爲に仇を報ふまでなり。汝ら良民が干ることにあらず。早く去て禍ひを避よ、必ず出て事を招くべからず。百姓等是を聞き半は信じ半は疑ひ只顧猶豫しける處に、黒旋風李逵双手に斧を輪し狂ひ來りしかば、百姓共これを見て大に膽を消し、盡く先を争ひ逃散けり。又副陣の方より若干の軍士來つて、火を救んとしける處に、花榮が箭に一人射殺され、諸人齋しく心を驚し、急に回して四面八方へ退きけり。已にして薛永、黃文炳が家に火を放つて焼立けるに、黒煙空に走せ地に匣、紅燄天に飛びて片時の間に前後左右都て灰燼と成りぬ。此時石勇、杜遷、李逵三人は遂に城門を開きければ、諸軍勢半は城門より走り出で、半は城上より跳出けり。張橫三阮兩童ら六人は城中に火の起しを見て、忙しく岸に上り、共に諸人を接へて船に乗らしめしかば、宋江晁蓋ならびに諸頭領、只黃文炳に遇ざりしことを恨み、各牙を嚙直に穆弘が館へと、舟を急ぎ漕去け

此夜江州城には無爲軍に火の起りしを見て、諸人騒動し、遂に蔡九知府に斯と告げし處に、彼黄文炳は此時知府と共に事を議して在りぬるが、無爲軍に祝融災ありと聞て、大に驚き、知府に申して某急に回りにて火を救はんとす。願くは一艘の官船を以て、某を送らしめ給へ。知府これを聞いて理りなりと、船を申し付て送せければ、黄文炳急に取り乗り、頓て江面に出無爲軍を望み見けるに、火勢盛にして紅焰天に冲る。黄文炳あわて驚きける所に、遙かに一艘の小舟漕來り、漸々黄文炳が船に近づきしかば、水手罵て云く、汝が其船何を官船を避ざるや。彼小舟の上に一人の大漢子進み出て云く、某らは出火の次第を江州城へ注進する舟なり、宜しく怒りを息給へ。黄文炳是を聞き、忙しく船ばたに出て問ひけるは、出火は何れの城門に當れりや。彼大漢子答へて云く、城の北門に當れり。黄文炳が家は梁山泊の頭領らに燒拂はれ、一家の男女悉く斬殺され、金銀財寶都て奪ひ去れたり。笑止のことかなと、黄文炳未だ聞きも了らず、這はいかに我家を燒れけるかと悔ければ、彼漢子これを聞き、忽ち釣索を投て黄文炳が船を搭住め、則ち身を躍せ官船に跳乗し所に、黄文炳は本奸智多きものなれば、はや禍あることを知て、忙はしく水中に跳入けるに、水底より又一人の漢子現れ出で、黄文炳を抱き上て船の内へ投げ入しかば、舟の上の男双手を擧て是を掖へ、頓て高手小手に絆めけり。今水底より現れ出で、黄文炳を抱上たる漢子は、便ち浪裡白跳張順なり。又舟の上より釣索を投て官船を搭住めたる漢子は、則ち是れ混江龍李俊なり。此の時官船の水主どもは、大に怕れ盡く懼

に跪て、一命を免し給へと詫しかば、李俊が云く、怨なき汝ら、今は殺すまじき間、早く江州へ回り、梁山泊の豪傑らが武勇を蔡九知府に告よ。我輩近々江州に攻め寄せて知府が首を刎んこと日あらじ。百萬の勢を以て鐵城に籠るとも、我輩が眼よりみれば、鼠を獵より易し、頭を洗て待と云ひ聞よ。水主ら命を免され際なく悦び、後をも見ずして漕去けり。李俊張順は黄文炳を活捉て心中大に喜び、遂に舟を回して穆弘が館へと急しかば、片時の間に岸邊に至りし處に、諸豪傑これを迎へ、同じく穆弘が家の草堂の内に入て、衆皆左右に列り坐せしかば、晁蓋宋江頓て黄文炳を引き出させ、柳の樹に綁着、これを肴となし、一盃酌べしとて、上は晁蓋下は白勝に至るまで、總て三十人の豪傑一々盃を擧て飲酒を催しけり。宋江先づ黄文炳を見て大に罵て云く、汝奸賊我と汝とは往日冤もなく近日仇もなし。然るに何ゆゑ再三再四知府を諫めて我を害せんとは圖りしぞ、我又酒興に反詩を吟じたりとて、何ぞ汝が關ることあらんや。汝も已に聖賢の書を読みつらん、人を殺さんとすれば、人又汝を殺さんこと書を見ざるものも、天道自然の理は辨へあり。汝いかなる恨あつて我と戴宗を殺さんとするや。汝が兄黄文炳は、汝とは同胞の兄弟なれども、専ら能く危きを助け貧きを救ひ、善を好んで惡をにくむゆる、人皆黄老佛と稱すと聞く。よつて昨夜黄文炳の家は毛頭犯すことなし。汝は専ら己に勝れる者を妬み、己に劣る者を弄し、唯よく惡を好んで善を惡むゆる、人汝を黄蜂刺と呼にあらすや。我今日汝を殺し、萬人の爲に一害を除べきぞ。尤も又近日蔡九が首も刎んとす。汝速

に分説ありや。黄文炳告げて云ふ、某今に至てその非を知れり、早く首を刎給へ。晁蓋大いに怒て我汝が首を刎ざらんや、汝早く今日の非を知らば災を免れんに、一向人を害せんとして、天罰早くも至るものかなと、牙を咬で罵りけり。宋江諸人に向て云ひけるは、諸賢弟の内、誰にても早く手を下し、此賊を殺し給へ。黒旋風李逵進み出て、我肯て長兄の爲に、此賊を殺さん。晁蓋が云く、汝是を殺さば彌可ならん。速に手を下し、我が賢弟宋押司の冤を雪ぐべし。此時李逵右の手に刀を揮ひ、左の手にては黄文炳を指さし、罵て云ひけるは、汝奸賊蔡九知府が後堂に在つて、再三知府を擯撥勸、我が長兄を害せんと圖りけるが、今日却て汝が殺さるゝは、則ち天のなし給ふ所なりとて、竟に頭を刎しかば、諸の頭領都て宋江に對して喜びを賀しにけり。宋江又諸人に對して云ひけるは、某不才たりといへ共、幸ひに天下の豪傑と交はりを結び、向にも已に晁天王ならびに、諸頭領の爲に再三山陣に留められしかども、父の命に背んことを忍びずして、遂に配所に赴きける處に、想はず酒興に乗じて亂言を壁の上に書き、禍ひ戴宗に及んで、兩人已に害せられんとせし處に、料らず又諸頭領に助けられて、仇人黄文炳を殺し、必腹の冤を雪ぎぬ。然れども今日かくのごとき大罪を犯しぬる上は、必定朝廷に奏聞して、某らを捉へんと圖るべし。某今晁天王等十七人の頭領に從つて梁山泊に上るべき間、此の外の賢弟らも某と俱に山陣に入らんと想ふ人は、宜しく用意を調て來り給へ。若又某に從ふまじきと思ふ人あらば、其所存を語り給へ。只恐らくは若し梁山泊に來り給はずんば、

後必ず官司に捕はれ、禍を蒙むり給ふことあらん。願くは明らかにこれを察し給へ。李逵これを聞いて躍出で云ひけるは、我輩悉く長兄に從つて山陣に上るべし、若一人にても從はざる人あらば、我此斧を以て頭を砍劈べし。宗江李逵を責て云く、汝何ぞ不禮の言をいふや。諸賢弟全く心傾けて歸服する時は、方に同往すべし。若し然らざるを、いかに強て誘引せんや。此時諸人議論して云ひけるは、今已に多くの官軍を殺し、兩所の州郡を鬧がしめければ、賊官等必ず朝廷に奏聞して、我輩を捕んとすべし。某ら今若し長兄に從はずんば、何れの所に馳て、身を藏さんや、只宜しく長兄と共に、梁山泊に上るべし。宋江是を聞いて大に悦び、此日朱貴、宋萬兩人を山陣に回らしめて、吳學究等に斯と告げさせ、翌日諸頭領を手分けし五行に備へて進發す。第一行は晁蓋、宋江、花榮、戴宗、李逵なり。第二行は劉唐、杜遷、石勇、薛永、侯健らなり。第三行は李俊、李立、呂方、郭盛、童猛等なり。第四行は黃信、張橫、張順、阮小二、阮小五、阮小七等なり。第五行は燕順、王英、穆弘、穆春、鄭天壽、白勝等なり。總て二十八人の豪傑、一千餘人を引いて次第を序で首尾を連ね、最嚴に備へけり。穆弘は數乗の車に、父穆太公並に眷族其外家財等を載、則ち一把の火を放つて家を焼拂ひ、五行の人馬已に打立ち、其間僅二十里を隔て押行ける。已に道を経ること三日に及び、黃門山と云ふ處に至り、宋江則ち晁蓋に對して云ひけるは、此山の形勢究て怪惡なり。恐らくは大勢の人馬山陣を設けて在ることやあらんすれば、宜しく後軍の至るを待て一同に過るべしと云ひも終

らざるに山上に金鼓の聲大いに響しかば、晁蓋宋江等しく駭き、各軍器を持って近く向ひける處に、山坂の邊より三五百の小賊閃き出で、當先に四人の頭領、各々軍器を揮て呼はり云ひけるは、汝ら大いに江州を圍し、無爲軍を襲ひ、若干の官軍百姓等を殺して、今梁山泊に回らんと欲するや。我輩四人此所に出て汝らを待こと久し。只宋江一人を留めて、我輩に與へなば、其餘の者どもは都て一命を饒すべし。宋江是を聞いて、馬より跳下り、則ち地上に拜伏して云ひけるは、某則ち宋江と云ふ者なり。向に惡人等がゆるに、害せられんとせし處に、諸の豪傑に救はれて、一命を脱れたり。某曾て足下らを犯したることなし。只望むらくは仁慈を垂給ひて、某并に諸人の命を饒し給へ、若し然らば身を終るまで此恩を忘るまじ。四人の頭領是を聞き、慌て忙めき馬を滾び下り、再三再四宋江を再拜して慇懃に云ひけるは、某四人久しく、長兄の大名を聞き及び、且暮渴想の思に逼りしか共、縁熟せずして未だ尊顔を拜せざりけり。前日江州に於て入牢し給ひぬと聞きしゆゑ。急に人數を馳牢を劫んと圖りしか共、未だ虚實を分明に知らず。先づ一人の山兵を江州に馳て動靜を伺はせけるに、梁山泊より餘多の豪傑來つて押司を奪ひ取り剩へ無爲軍を犯し、黃文炳一家を燒打せりと告げるゆゑ、某四人に悦び、則此所に出て迎へて、尊顔を拜せんとするに、果して今日長兄を觀奉ること莫大の幸ひなり。願くは長兄諸の豪傑と共に、某らが山陣に駕を枉給はば、聊村酒を具へて一盃を獻すべし。宋江大に感悦し、則ち四人の頭領を扶起し對面し、其姓名を問ひけるに、一人は姓は歐、名

は鵬、原黃州の人にて綽名を摩雲金翅と號す。又一人名は蔣名は敬、本湖南潭州の人にて綽名を神算子と號す。又一人は姓は馬名は麟、元南京建康の人にて綽名を鐵笛仙と號す。又一人は姓は陶名は宋旺、舊光州の人にて、綽名を九尾龜と號す。此四人の頭領宋江を迎へて談話いまだ終らざるに、小賊らはや酒を携へ來つて、先づ晁蓋宋江に獻じ、次に花榮戴宗李逵に獻じ、衆人都て相見え快く酒を酌て一時ばかり過しける處に、第二行の頭領已に至り、同じく相見え盃已に數遍巡りしかば、四人の頭領先づ二行の頭領十人を請て、黃門山の陣中に至り、則ち聚義廳に於て美しく酒宴を設けて款待けり。又一時餘り過ける處に、第三行の頭領も同じく此處に至り共に宴上に列りける。宋江先づ四人の豪傑に對して云ひけるは、我れ今義兄晁天王を頼んで梁山泊に上り、ともに大義を結んで死生を同じうせんと欲す。しらす足下等四人も此所を棄て、同じく梁山泊の大陣に入り、盟を誓ひ給はんや。四人の頭領大いに悦んで云ひけるは、若し兩人の長兄、某らを棄給はずんば、共に大陣に伺候して犬馬の勞を施すべし。晁蓋、宋江喜悅斜ならずして云、賢弟ら已に我輩を助けて梁山泊に來らんとならば、早々此所を收拾て發足あるべしとて、其日全く事を調へしむる處に、四行五行の頭領並び總人數皆到着せしかば一同に此山陣に一宿し、翌日晁蓋宋江再び備へを列ね進發す。彼四人の頭領は手下の小賊五百餘人を領し、第六行に備へて進發す。宋江は又四人の豪傑を得て心中大いに悦び、則ち轡を並べ語りけるは、某異郷に流落し、數度恐懼を受しといへども、許多の豪傑と義を結び、今日長兄に従つて山陣に赴

くこと萬千の幸ひなり。向後いよく某と長兄とは必ず生死を同じうすべしと談話し、互に興を催し路を行きける程に、覺えずはや朱貴が店に至り、此時山陣を守りて留主居したる、四人の頭領吳用、公孫勝、林冲、秦明等は新參の頭領蕭讓、金大堅と俱に朱貴朱萬が注進を聞き、比日先達て朱貴が店に至り専ら待わびし處へ、晁蓋宋江并に諸頭領衆皆恙なく至れるを見て、大に悦び忙しくこれを迎へ、直ちに金沙灘に至り、金を鳴し鼓を擡つて、共に山陣に上り、則ち聚義廳に於て酒宴を設け香花を備へ、宜しく歸山の賀を表しけり。晁蓋此時山陣の主を再三宋江に譲りて、第一位の座に請ければ宋江大に辭してはいはく、長兄何ゆゑかゝることを云ひ給ふや、此度某已に殺されんとせしを、諸頭領に救はれ此恩報しがたきことを、某深く憂ひとするに、いかにぞよく第一位の座を犯して山陣の主たらんや。長兄もし再三これを譲り給はば某自ら死をなすべし。晁蓋が云く、當初某ら七人もし賢弟の救ひを蒙らずんば、いかにぞよく今日の福あらんや。賢弟は原來山陣の爲には恩主なり。若し賢弟第一位の座に即給はずんば、誰かあへて此の座を犯さんや。必ずこれを辭して我が心を煩はしめ給ふな。宋江が云く、長兄は齡も已に某に二十歳の長なり。某もし一座に就ば自らこれを差殺すべしとて、頻りに辭し、遂に晁蓋を第一位に座せしめ、宋江第二位、吳用第三位、公孫勝第四位に座しければ、宋江又諸人に對して云ふ、今日は先づ舊頭領は左の主位に座し給へ、新頭領は右の客位に座し給へ、後日其功の輕重を論じて、方によく座位を定むべし。諸頭領これを聞いて然りと同じ、乃ち左の方の

一連には林冲、劉唐、阮小二、阮小五、阮小七、杜遷、宋萬、朱貴、白勝等座しければ、右の方の一連は花榮、秦明、黃信、戴宗、李逵、李俊、穆弘、張橫、張順、呂方、郭盛、蕭讓、王英、薛永、金大堅、穆春、李立、歐鵬、蔣敬、童威、童猛、馬麟、石勇、侯健、陶宗旺等座しにけり。總て四十人の豪傑左右に座を列ね、大に樂を奏し飲酌を催しぬ。宋江又諸頭領に對して語りけるは、蔡九知府京の童子等が歌ふ謠言を以て、黃文炳に告げ知せけるに、黃文炳亂に其謠言の意を解て、則ち宋江の二字に應せしめ、某を謀反人にしけるゆゑ、知府急に某を捉、又戴院長が携へたる返簡の眞ならざることも、原知府これを知らざりしかども、又かの黃文炳圖書の上に蔡太師が諱の字あるを見て、則ちこれを假たる返簡と知り、再三知府を擡擡て、先づ某と戴院長とを殺さしめんと欲しぬ。もし諸頭領の救ひにあらずんば、焉んぞ能く今日に至らんや。李逵進み出て云けるは、好哉長兄は天上の言語に應じ給ふよな、已に斯のごとくんば、彌多く人馬を聚めて、謀叛を企給ふとも何の不可なることかあらん。乃ち晁蓋兄は大皇帝となり給ひ、宋江兄は小皇帝となり給ひ、吳先生は宰相となり、公孫道士は國師となり、某らは都て將軍となり、速に東京の位を奪て彼所に移り、ともに歡樂榮花を保ば、必定此所にあらんよりは、大いに娛しかるべし。戴宗聞きもあへずこれを責て云く、汝何ぞ擡に亂言をいふや。汝今日已に此所に至る上は、昨日江州に在し時とは同じからず、すべからく兩長兄の命令を承つて、諸事これを謹慎べし。再び言語を亂りに申すことなかれ。若し我が諫言を容ひ

すんば、則ら兩長兄の命を受て汝が首を刎て以て衆人に警さん。李逵是を聞て云ふ、長兄果して我が頭を刎給は、いづれの時か重新に又頭を生せんや。先づ宜しく酒を飲み置くべしとて、自ら大盃を取て酌ければ、諸の豪傑ども一度に咄と一咲を催しけり。晁蓋心中に今日の會を悦ぶこと限りなく、則ち金銀を分て小賊どもに恩賞を行ひ、猶且山前山後に若干の房屋を作りて、諸頭領の眷屬らを住せしめ、此より山陣に光を増こと大いにして、威を遠近に振ひけり。一日宋江諸頭領に對して云ひけるは、我幸ひに命を脱れ、山陣に上り毎日諸兄弟と共に飲宴をなし、甚だ樂しいへども、只恨らくは老父某が禍を蒙むることあらん。某既に大罪を犯したることなれば、必定朝廷より鄆城縣に文書下りて、某一家を捕ふべし。恐らくは老父が命も旦夕を保がたからんと思へば、我常にこれを念て、寸志を安んずる違あらず。是に因て先づ暫く、山陣を離れて故郷に回り、急に老父を奪ひ取て、共に山陣に上るべし。しらす諸兄弟これを許し給ふべきや。晁蓋が云く、賢弟の欲し給ふ所、則ち人倫の大事にして、生を養ひ死を送るは人の子の道なれば、今尊父を迎へ山陣に來り給はん事大いに可なり。然れども只恨らくは諸兄弟連日辛苦して、陣中の人馬いまだ定らず、猶三日を延引したまは、人馬を起して俱に鄆城縣に發向し、終に尊父を奪ひ取て賢弟の所望を准ふべし。宋江が云く、數日延引せんは易けれども、只恐らくは朝廷より文書下つて、はや老父を擒とすべければ、日を延て遅々せんこと能ふまじ。殊に人馬を引て發向せば、却て事を誤つべし。只某一人暗に馳往、家弟宗清とともに

老父を奪ひ取つて、早速山陣に回らん。然らば是を知る人無うして、事彌穩かなるべし。晁蓋が云く、賢弟の高見其の理あるに似たれども、若し萬一途中に誤あらば、誰か肯て賢弟を救ふ人あらんや、尙自ら三思を加へ、これを察し給へ。宋江が云く、父の爲に死なば、何の怨あらん、只願遅疑せんやとて、即日發足の用意を調へし處に、晁蓋等色々留むれども宋江更に留らず、頓て諸頭領に別れ山を下りしかば、晁蓋以下の豪傑ども、悉く金沙灘まで送りて、遂に袂を分ちけり。

還道村にて三卷の天書を受く

扱も宋江は鄆城縣を望で進發し、不日に宋家村の近邊に至り、其夜は先客屋を求めて一宿し、翌日未明に宋家村の十里前なる林の内に入て、其日の晩るを待、漸々紅日西山に落て、はや初更の時も近づきしかば、宋江暗に林の内を出て、逕ちに宋太公家の後門に至て、ほとくと敲きしに、宋清已に門を開て走り出、即ち宋江を一目見て大に驚ろき、長兄は何ゆゑ、家に回り給ふや。宋江が云、我此度來りしは、老父と汝とを迎へ取んが爲なり。宋清が云、長兄向に江州城にて犯し給ひし罪の次第、はや此所の人都在てこれを知りぬ。頃日知縣相公常に兩人の都頭を我家に遣し、緊く前後の門を守らしめ、只文書の到來するを待て、我輩父子を捉んとのことなり。是に依て我ら父子寸歩も家を出ること能はず。近日父子同じく入牢せんこと必定なり。長兄再び梁山泊に回り給ひ、速に諸頭領と共に發向在て、老父並に某が一命を救ひ給へ、必ず疑惑遲滞して自ら誤ち給ふことなかれ。宋江これを聞

て大におどろき、此より直に身を回して再び道中に馳出、唯足に信せて梁山泊へと走り行く。此夜月色朦朧にして路分明ならざれば、宋江益々心を忙はしめ一向急に走りて一時許馳ける處に、忽ち背後に數十人の聲あつて、大いに呼はりしかば、宋江頭を回してこれを見るに、一簇大把を揮照して諸人に齊しく高聲に呼つて云、宋江走ることなけれ、早く手を束て綁に就。宋江是を見て心中に悔て想ひけるは、我不幸にして晁天王の諫言を容す、果して今宵禍あり。願くは皇天憐を垂て、宋江が一命を救ひ給へと心中に是を禱り、頻りに足を飛せ走り行く處に、漸々風薄雲を拂ひ、一輪の明月現れ出しかば、宋江月の光に乘じ、此所をみるに、都て峨々たる高山なり。山の下四方潤連り水深して其中に只一筋の道あり。此所は還道村と云所なり。宋江直ちに村中に馳入て、身を躲さん所を尋ね求るに、林の内に一つの古廟ありしかば、宋江急に廟門を推開いて進み入、前殿後殿徧く繞り、隠れ所を求めしかども、更に身を安んずべき所もなく、彌心を驚かしめける處に、外面に人在て、多くは此廟内に躲れしならん。こゝを捜せと呼はるを聞に、是郟城縣の新都頭趙能趙得が聲なりしかば、宋江大に膽を消し、廟神の前に掛たる帳幔の内に入て躲れけり。此時兄弟の都頭、趙能趙得自ら四五人を引て、廟中に進み入、火把餘多揮照させて此彼捜しければ、宋江心中に神を禱りていはく、望むらくは神明某が一命を救ひ給へと合掌しけるに、諸人都て廟神の前を過ぎて、帳幔の内を見る者一人もなかりしかば、宋江これを悦び、暗に息を嚔と續ける處に、彼趙得自ら火把を揮て、帳幔の内を

照し見るに、忽ち火把の火飛で、趙得が眼の上に落ければ、趙得大に驚いて、覺えず火把を地上に棄て再び帳外に走り出で、即ち衆人に對して云けるは、彼かつて廟中にあらず、又逃出でつらん路なきに、知らず何れの所に行しぞと、衆皆奇異の思ひをなしけり。此時一人の土兵が云けるは、彼必定還道村の林の内に入つて躲れあらん。此還道村と申は、只一つの道在つて出入す。村中には獨り高山林木多きのみにして、更に別路なし。彼も果して林の中に入つて隠れあらば、恰も籠の内の鳥にして、終に手を束て捉はるべし。兩都頭宜しく村口を守り給へ。曉なば早々林の内を搜して活捉べし。彼たとひよく却を挿て天に飛とも、脱ること叶ふまじ。趙能趙得是を聞て然りと同じ、即ち土兵等を引いて再び廟外に馳出けり。宋江暗にこれを見て、心中に悦び、尙神明を祈つて身をも動さず、躲れ居ける處に、一人の土兵廟門の前に在て呼はりけるは、兩都頭再び廟内に入り給へ、彼必ず此内に在べし。趙能趙得是を聞き、又衆人と共に、廟前に至て問けるは、汝何を以て彼此内に在んと云や。彼土兵が云、兩都頭廟門の上を見給へ。二つの手の跡明々として塵の上にあり、彼今廟門を推開いて内に入たるに疑ひなし。趙能が云、汝が言明かなり。再び衆人を引て廟中に入り、四面八方一々仔細に搜しければ、宋江は只命運の拙きことをぞ嘆じけり。土兵ども都て火把をてらし、前後左右搜さずと云所なし。趙能が云此上は、再び帳幔の内に頭を入れ、則ち火把を照し、纔かに聞き見んとせし處に、忽ち一陣の怪風起て、若干の火把同時に吹滅しければ、暗々と黒うして、面を對すれども見え

ざりけり。趙能が云、怪しき哉廟中に風起るはいかん、我是を察するに我輩再三廟中を聞きむるゆゑ、神明の惡み給ふならん。是に依て今此恠風起れり。我輩先廟外に出て、只嚴に村口を守り、夜明なば再び來つて搜すべしとて、遂に人數を村口に引取り。宋江は帳幔の内に在て、暗に想ひけるは、我今神明の佑を被りて縲綫の辱めを免れたりといへども、彼輩猶ほ村口を守てあるべければ、いかんぞよく此村を逃出でんやとて、只願心を患はしめ、覺えず眼を合せて眠りける處に、夢中又殿の後より人來りしかば、宋江大いに驚てこれをみるに、兩人の青衣童子逕に帳幔の前に至て、宋江に對して云けるは、我今娘々の命を奉て、星主を迎へんが爲、此所に來れり、星主早々我に従つて尊歩を移し給へ。宋江是を聞きかども、只頭を低て一言も答へざりけり。又彼童子兩人がいはいく、娘々今星主を迎へて談話し給はんとなり。宜しく速に來り給へ。宋江彼兩童子が言は鶯の聲燕の語にして男子の音聲にあらざりしかば、略頭を擡て熟々みるに、果して兩人の女童なり。宋江大に性しんで問けるは、兩人の女童は實に何れより來り給ふや。女童が云、娘々の命を奉て、星主を宮中に迎ふ。宋江が云、仙童此に至り給ふは、必定人差ひならん。某は姓は宋名は江と號す。星主とやらん云人は某がことにあらず。女童曰、我いかんぞ人を差へんや。星主今宮中に至て娘々に見え給ひなば、其來歴自ら知り給ふべきに、早く我に隨て來り給へとて、再三再四宋江を引て、後殿の傍に至り、兩人の女童又一ツの墻門有を指さして云けるは、宋星主此墻門より入給へとて、則ち宋江を導き門内に入しか

ば、宋江私に此所に至り頗る恐入て見るに、星月明朗として香風馥郁たり。宋江想道此廟の後、にかのごとき風景よき所ありけるよなと、又一里許過て此邊をみるに、左右は皆大なる松樹枝を交へて稠密、其中央には一つの大路あり。前面には潺々と澗泉響て青石の橋あり。兩邊は都て朱欄杆なり。岸の上には奇花異草妻々として、佳色こと一輪の月に映じて、麗しく清香を一陣の風に寄す。しかも茂れる竹柳の翠まで自ら凡からず、偏に人間の住所とは見えざりけり。宋江益躊躇して思ひけるは、我近く鄆城縣に在りしかども曾てかゝる所あるを聞ず、誠に稀有の光景かなと、讚美感心して已す。兩人の女童遂に導いて宮門の内に入るに、此所に又一つの大殿あり。殿上には燈燭熒煌白晝のごとし。宋江已に塔の前に至りしかば、數箇の女童出迎へて云けるは、娘々待侘ておはします。星主早く進み給へとて、即ち宋江を延て大殿の上に至りしかば、宋江覺えず戰慄毛髮倒に豎ぬ。彼女童玉簾の内に入て啓奏ていはく、宋星主今簾の前に至り給ひぬ。宋江は是を聞て、地上に拜伏し奏しけるは、臣は則ち下濁の庶民にて聖上を識らず、伏して冀くは憐憫を垂れ給へ。此時數箇の女童、玉簾を高く捲ける處に、一人の娘々玉音を開てのたまはく、星主別來恙なきや。宋江再拜して云、臣は則ち一箇の庶民なり。いかんを敢て聖顔を觀奉らんや。娘々の云く、何ぞ必しも大禮に及ばんや、宜しく面を擧て對談し給へ。宋江謹で命を奉り、乃ち頭を擡て殿中をみるに、七寶九龍床の上に一人の娘々坐し給ひけるが、頭には九龍飛鳳の髻を結び、身には金縷絳絹の衣を穿、藍田の玉帶長

き裙を曳き、白玉の圭障彩袖を撃げ、顔は蓮の夢の如くにして、天然の眉目雲環を映し、唇は櫻桃に似て自在の規模雪體を端す、誠に凡女とは見えざりけり。彼娘々宋江に對して宣ひけるは、星主宜しく酒を酌み給へとて、小童に命じ給ひければ、一人の女童玉の盃に酒を醸で、宋江に獻す。宋江恭しく玉盃を接てこれを飲みけるに、此酒香ひ馥郁其味ひ甘露のごとし。又一人の女童一盤の仙棗を捧て、宋江に進めぬ。彼娘々再び女童に命じて、又一盃を勸め給ひければ、宋江慎んでこれを飲み、酒已に數盃を給り、娘々女童に命じ宣ひけるは、汝宜しく三卷の天書を携へ出て、星主に與へよ。女童命を奉り、頓て屏風の背後に入り、即ち三卷の天書を携へ出て、宋江に與ふ。宋江拜受してこれを袖の内に納め、再三頓首して謝し奉る。娘々の云我己に三卷の天書を以て星主に授けし間、星主も亦天に替つて道を行ふの主となり、忠を全うし義に仗て臣となり、國を輔け民を安んじ、邪を去り正しきに歸るべし。我また四句の天言を星主に授け。星主これを記して心に忘るゝことなかれ。又世に漏すことなかれとて、則ち四句の語を誦へて宣はく、

遇宿重々喜、逢高不二是凶。北幽南至睦、兩處見奇功。

宋江已に聞き罷り、再拜頓首してこれを記せり。娘々宜しく星主は是魔心未斷たず、道行未定からず。かるがゆるに、玉帝暫く汝を罰して下界に下らしめ給ふ。汝宜しく此三卷の書を熟覽すべし。功成て後は必ず此書を焚べし。必しも世に遺すべからず。今天凡相隔たりしゆゑ、久しく星主を留かた

し、汝速に回るべし。他日天帝に見え奉らん時、再び玉樓金闕の上に於て相會すべしとて、則ち又兩人の青衣女童に命じ、送らしめ給ひしかば、宋江謹んで娘々を拜謝し、遂に玉殿を下つて、兩女童とともに石橋の邊に至りけるに、兩女童が云、星主先に危急なりし時、若娘々の救ひにあらすんば終に生捉れ給はんに、娘々星主を助け給ひし故、今己に恙なし。天明なば此難を全く脱れ給ふべし。必ず心を苦しめ給ふことなかれとて、又橋の下を指さし、宋江に告て云けるは、水中に二ツの龍有て形を現したり。星主はやく是を見給へ。宋江これを聞て、慌て忙めき欄杆に凭れ、橋の下を望み見るに、果して二ツの龍の水面に現れしかば、宋江自ら奇異の想をなしける處に、兩人の女童後より宋江を水中に推落しぬ。宋江大に駭き阿と一聲呼はりけるに、忽ち眠り醒依然として帳幔の内にあり。是則ち南柯の一夢なり。宋江忙しく起て月色をみるに、時まさに四更に近し。宋江現に袖の内を摸けるに、果して三卷の天書あり。宋江心中に想ひけるは、此夢大いに奇異なり。我が口中にも猶酒の香あり。娘々の授け給ひし四句の天言都て心にも覺えて一字も忘れず。此廟中には必定神明の靈感なる者在て、現化し給ひぬるに疑ひなし。只しらすいかなる神明にやと、帳幔の内に又一ツの錦帳あるを高く掲て此内を見るに、まだ夜の明ざれば、冥々幽々として見定めがたくぞ有ける。

宋江明九天玄女に遇ふ

暫時して鷄鳴鳥告て横雲を催す頃、四方の間白ければ宋江再び錦帳の内を伺ふに、七寶九龍床の上に

一人の娘々座し給ひけるが、夢中に拜せし娘々と半點も差ふ所なし。宋江急にこれを拜謝し、又暗に想ひけるは、這娘々我を呼で星主と稱し給ひぬれば、恐くは是前生の預る所にして、我原等閑の人にあらじ。此三卷の天書必然用る所あらん。又彼兩人の女童我に告て、天明なば此難を全く脱れ給ふべしと云けるに、我宜しく路を求めて逃行んとて、則ち帳幔の外に出、再び廟門の前に至つて額を見るに、玄女之廟と云ふ四ツの金字ありしかば、宋江忽ち拜謝して云く、いかなる神明にやと想ひけるに、原是九天玄女なるよな。我もしよく重て天日の面をみることにあらば、必ず來つて廟を新に建立し、聊か以て今日の恩を報い奉らんと觀念し、遂に村口を望で馳出ける處に、前面に人音大に響しかば、宋江又甚だ驚き、路傍の木陰に躲れ伺ひ見るに、數多の士兵忙はしく走り來り、各一齊に聲を揚て神明救ひ給へと呼はりけり。其跡より彼趙能息を限りに逃來り、我が輩が一命脱れがたしと呼はりけるを、宋江是を聞き想ふやう、彼らは都て村口を守り専ら我を捉んとこそ圖りけるに、何故却て騒動するやと疑ひ在處に、背後より一人の大漢子、奔雷のごとく吼り狂うて跑來り、奸賊何國へ逃るやと大音聲に罵つて、遂に趙能が頭を斧を以て砍劈ぬ。宋江かの大漢子を見るに、乃ち黒旋風李逵なりしかば是又夢かと疑ひけり。其次に又兩人の豪傑跳け來る。一人は鷓鴣一人は陶宗旺なり。則ち李逵とともに軍器を揮つて士兵どもを四面八方に趕散す。其跡より又三人の豪傑馳來る。一人は赤髮鬼劉唐、一人は石將軍石勇、一人は催命判官李立なり。都て六人の豪傑ら相聚て云ひけるは、士兵らは追散せしといへども、獨宋長兄の見え給はぬはいかん。石勇が云ふ、木陰にかくれある人みゆ。恐らくは宋長兄ならん。此時宋江走り出て云ふ、諸の賢弟今日又來て我を救ひ給ふこと、其恩天地と等し、何をもつてよくこれを報せんや。六人の豪傑宋江を見て大いに悦び、長兄恙なきこと何の福かこれに過ぎん。先速かに晁天王に告んとて、石勇李立飛ぶが如くに馳去けり。宋江又劉唐に問て云ふ、賢弟らは何を以て我が此に在ることを知り給ひしや。劉唐がいはく、長兄前日山を下り給ひて後、晁天王と吳軍師頻りに心を安んせず、則ち戴院長を遣し、長兄の消息を求めしむといへども、晁天王猶心を安んせず、又某らを引て親自半途まで打出ける處に、幸ひ戴宗が回り來るに逢て、長兄の難に遇給ふ消息を聞、晁天王大に怒り、忙しく此邊に至て長兄を尋し處に、人在て告けるは、趙家の兩都頭若干の士兵を率して、宋江を還道村に追入ぬと詳かに語りしゆゑ、某ら皆晁天王に隨つて還道村に斬て入り、士兵ら許多討取、都頭趙得をも討取猶此所まで追來り、思はず長兄に見えたりと、いまだ云も終らざるに、石勇はや晁蓋、花榮、秦明、黃信、薛永、蔣敬、馬麟等を引て來りしかば、李立は又李俊、穆弘、張橫、張順、穆春、侯健、蕭讓、金大堅等を引來りぬ。晁蓋先宋江に對して云ふ、我再三賢弟を諫めけれども、我が言を用ひ給はずして、果して禍に遇給へり。宋江が云ふ、某且暮老父がことのみに心に掛り座臥安からず。尤も止ことを得ずして、再び故郷に歸り、又此難に遭うて多く長兄に心勞を掛ぬ。晁蓋が云ふ、賢弟心を安んじ給へ。我先に戴宗、杜遷、宋萬、王英、鄭天壽、童威、童猛

しといへども、獨宋長兄の見え給はぬはいかん。石勇が云ふ、木陰にかくれある人みゆ。恐らくは宋長兄ならん。此時宋江走り出て云ふ、諸の賢弟今日又來て我を救ひ給ふこと、其恩天地と等し、何をもつてよくこれを報せんや。六人の豪傑宋江を見て大いに悦び、長兄恙なきこと何の福かこれに過ぎん。先速かに晁天王に告んとて、石勇李立飛ぶが如くに馳去けり。宋江又劉唐に問て云ふ、賢弟らは何を以て我が此に在ることを知り給ひしや。劉唐がいはく、長兄前日山を下り給ひて後、晁天王と吳軍師頻りに心を安んせず、則ち戴院長を遣し、長兄の消息を求めしむといへども、晁天王猶心を安んせず、又某らを引て親自半途まで打出ける處に、幸ひ戴宗が回り來るに逢て、長兄の難に遇給ふ消息を聞、晁天王大に怒り、忙しく此邊に至て長兄を尋し處に、人在て告けるは、趙家の兩都頭若干の士兵を率して、宋江を還道村に追入ぬと詳かに語りしゆゑ、某ら皆晁天王に隨つて還道村に斬て入り、士兵ら許多討取、都頭趙得をも討取猶此所まで追來り、思はず長兄に見えたりと、いまだ云も終らざるに、石勇はや晁蓋、花榮、秦明、黃信、薛永、蔣敬、馬麟等を引て來りしかば、李立は又李俊、穆弘、張橫、張順、穆春、侯健、蕭讓、金大堅等を引來りぬ。晁蓋先宋江に對して云ふ、我再三賢弟を諫めけれども、我が言を用ひ給はずして、果して禍に遇給へり。宋江が云ふ、某且暮老父がことのみに心に掛り座臥安からず。尤も止ことを得ずして、再び故郷に歸り、又此難に遭うて多く長兄に心勞を掛ぬ。晁蓋が云ふ、賢弟心を安んじ給へ。我先に戴宗、杜遷、宋萬、王英、鄭天壽、童威、童猛

らに命じて尊父并に令弟貴族盡く奪ひ取らしめ、はや山陣に送りぬ。宋江これを聞て大いに悦び、則ち晁蓋を拜謝し、其恩を感じけり。晁蓋諸人に下知して、還道村を馳出で遂に山陣に至りしかば、吳學究ら金沙灘に出迎へ、共に大陣の聚義廳に入て、各座定りける處に、晁蓋頓て宋太公並びに宋清を請て宋江に見えしむ。宋江老父を見て大いに悦び、則ち再拜して云ふ、大人我がゆゑに多くの禍を蒙り給ひて、嘸苦しみ給ひしならん。願くは不孝の罪を許し給へ。宋太公が云く、我向に趙能趙得に前後の門を緊く守られ、寸歩も家を出ること能はず、只手を束ねて締めらるゝを待居ける所に、數百人の將卒來つて我が一家を奪ひ取、直に此所へ携へ來りぬ。汝先に我家の後門に來りし時、趙能兄弟汝を見著、忙はしく馳て汝が後を慕ひけるが、汝定めて緊く趕れしならん。宋江が云ふ、今日父子再び參會すること、都て晁天王ならびに諸頭領の力なり。宋清汝宜しく諸豪傑を拜謝せよと命じければ、宋清則ち諸の頭領に見えて恭しく拜謝しぬ。晁蓋ら衆人都て宋太公に見え、遂に牛を殺し馬を幸て大に飲酌を催しけり。宋江父子三人此より山陣に在て、悦ぶこと限りなし。一日公孫勝諸頭領に對して云けるは、某幸ひ晁天王に従ひて山陣に上り、諸英雄と斷金の交りななし、若干月日宴を同じうして相娛み、却て故郷のことを忘れたり。某一人の老母蘇州にあり。又一人の老師も同じく彼所にあり。某今日暫く諸頭領に別れ故郷に回リ、老母の安否を候ひて再び山陣に上るべし。晁蓋が云ふ、公孫先生尊母を伺ひ給はんには、某あにこれを阻當んや。然れども只別離に忍びず。今日は且俱に

酒宴を樂み給ひ、明日山を下り給へとて、其日は酒を酌め別れを惜みけり。翌日公孫勝は旅裝を調へ諸英雄に別れ山を下りしかば、山陣の頭領共都て金沙灘の邊に送り、又盃を勸めて陽關の曲を歌ひ、晁蓋再三叮嚀に云けるは、公孫勝先生此度の歸郷、我もとこれを阻當べしと思ひしかども、老母を伺ひ給はんとのことなるゆゑ、我あへて其志に違はず、只望らくは四五ヶ月の内再び光臨を惠み給へ。必ず約を失ひ給ふな。公孫勝が云ふ、某重く諸頭領の愛憐を蒙り、豈あへて約を差んや。老母と老師とを伺ひなば早速歸山すべし。宋江が云ふ、公孫勝先生は何ゆゑ尊母を山陣に迎へたまはざるや。公孫勝が云ふ、某が老母は平生只靜なることを好んで、鬧しきことを嫌ふ。是に依て迎へがたし。某が家には猶幸ひ田地あり。故に老母はよく水米の憂へを免れぬ。某只一たび老母に見えなば、速に歸山して再び義を全うすべし。晁蓋一盤の金銀を公孫勝に送つて餞を表し、陽關の曲已に罷りしかば、公孫勝遂に諸頭領に別れ、蘇州を望んで馳行けり。扱晁蓋、宋江、吳用、其外公孫勝を送つて山陣に上らんとする時、黒旋風李逵忽ち聲を放つて大に哭しかば、宋江忙しく問て云ふ、賢弟何ゆゑ流涕するや。李逵哭て云ふ、這は去て父を邀へ、那は去て母を訪ふ。唯我は是虛空より生じぬるや。晁蓋問て云ふ、汝今これをいかに。李逵が云、我實に一人の老母あり。某が兄は家貧き者なれば、いかにぞよく母を優に養はんや。某母を迎へて山陣に至らば、宜しく是を奉養して朝夕事んことを欲す。晁蓋が云ふ、汝が欲する所乃ち孝道なり。我數箇の人を従はしめて、老母を山陣に邀へ取べし。宋江が

云ふ、不可なり。李逵は原其性烈火のごとくにして、動もすれば事を惹出す。此度もし故郷に回らば必然誤ちあらん。向に江州城に於て、若干の人を殺しぬれば、官司いかんぞ李逵を捜さらんや。彼又相貌兇惡にして人皆識認者多し。若萬一半途に於て疎失あらば、誰かあへてこれを助けんや。汝先暫く月日を延引し、世間の靜謐するを待て此事を圖るべし。李逵大いに焦燥て云ふ、宋長兄何ぞ斯のごとく公ならざるや。自家の老父は已に山陣に邀て樂ましめ、我老母は只故郷に棄下て苦ましめんとや。願くは事を直に治め給へ。宋江が云ふ、汝安りに我を恨ることなけれ。汝若いよ、急に老母を邀へんと思は、我汝に三ツの事を示さんに、宜くこれを守つて誤らすんば我汝を放ち遣さん。李逵が云ふ、長兄若し給はんことあらば、一向これを云ひ給へ。我盡くこれを守るべし。宋江が云ふ、汝今故郷に回り、老母を邀へんと欲せば第一には道中にあらん時、必ず酒を飲で自ら禍ひを取ることなけれ。第二には汝もと短氣急性なるに因て、人を従はしめがたし。只汝一人暗に往て暗に回るべし。第三には汝が常に使ひ慣たる彼二ツの斧を携ることなけれ。道中に於て縦ひ何らの事ありとも、自ら能くこれを忍ぶべし。是乃ち我が汝に示す所の三事なり。しらすこれを守るべきや。李逵が云ふ、此三事何ぞ難とせんや。盡く肯てこれを守べし。即ち今日發足し、早く往て速に回るべきあひだ、長兄我が爲に心を安じ給へ。晁蓋宋江許若の銀を送りければ、腰刀朴刀を持ち、諸頭領に別れ、沂州沂水縣を望して馳行けり。晁蓋宋江らは、衆皆山陣に上て聚義廳に相聚り、各座已に定りしかば、宋江先衆

人に對して云けるは、我熟李逵が事を思ふに、這回必然誤ちを免るまじ。若彼と同郷の人あらば、早沂水縣に馳て消息を探聽しめん。杜遷進み出て云ふ、朱貴は原沂州沂水縣の人にして、李逵とは同郷なり。しらす彼を遣はし給はんや。宋江が云ふ、誠に前日白龍廟にて參會したる時、李逵と朱貴互に故郷の好みをのべて悦びけるに、我已にこれを忘れたれ。速に朱貴を呼で商議すべしとて、一人の小賊を馳ければ、小賊頓て麓に下りて朱貴に斯と告げれば、朱貴遂に山陣に上つて晁蓋宋江らに見えし處に、宋江先朱貴に對して云ふ、此たび李逵老母を邀へんが爲、故郷に回りしかども、彼原烈性の者なるゆゑ、我其和すまじきを恐れ、一箇の人をも跟ざりし。彼もし道中に於て何らの禍を受るとも、我が此所よりは路遠ければこれを知りがたし。汝は彼と同郷なるに、宜しく勞を辭せずして、沂水縣に赴き暗に彼が消息を探聽んや。朱貴が云ふ、某原沂州沂水縣の産にして、今一人の弟朱富と云ふ者沂水縣の西門の外に居住せり。彼も又一人の兄李逵と云者あり。家尤も貧し。某久しく家弟が音耗をも聞かざりしかば、此度彼所に赴かんこと自ら願ふ所なり。宋江是を聞いて、大いに悦び、明朝發足有べしとて、朱貴を山陣に留め、三盃を勸め且路費を與へければ、諸の頭領に別れ、遂に沂州へ進發せり。扱黒旋風李逵は獨自ら梁山泊を離れ、故郷へと急ぎしかば、不日に沂水縣の界に到着せり。此李逵母を擔來る道に母を虎に噉れ、其身は生捕となり、朱貴に救はるゝ種々次卷に具さなり。

四編卷之九

假李逵の剪徑單人を劫す

黒旋風李逵は老母を邀んため、一旦故郷に向ひ、沂水縣の近くへ來りし處、城の西門の外に一族の人聚て、榜の文を見てありければ、李逵も同じく諸人の内に雜て、榜を讀を聞に、第一名の正賊は鄆城縣の宋江、第二名の賊は江州の戴宗、第三名の從賊は沂水縣の李逵と讀ければ、李逵これを聞て大いに驚きし處に、忽ち背後に人在て、李逵が肩を打て云ひけるは、李公此に在て何をなすや。李逵急に頭を回して其人を見るに、乃ち是早地忽律朱貴なり。李逵問て云ふ、汝は又何故此所に至れりや。朱貴が云ふ、汝まづ我に従つて來れとて、兩人同じく西門の外に近村に馳て、一軒の酒店の内に入り、朱貴乃ち李逵を指さして云ふ、汝いかにぞかく大膽に榜文を見るや。今官司賞錢を出して云ふ、宋江を捉へん者には一萬貫の錢を賞し、戴宗を捉へん者には五千貫の錢を賞し、李逵を捉へん者には四千貫の錢を賞せんとす。然るに汝諸人と共に榜文を見るは、自ら禍を求るにあらすや。宋長兄一向汝が禍を惹引さんことを恐れ給ひ、同郷の好みなればとて、則ち某を此所に馳て、汝の消息を探聽しめ給ふ。我は汝より一日遅く山を下りしかども、却て汝より一日先に此所に至れり。汝は又道中に於て





不詳



朱富止李
うんりきがとく
雲李達風

何らの碍り有て斯遅々し、今日茲に至るや。李逵が云く、宋長兄我が酒を飲ことを堅く制し給ひぬるゆゑ、我道中に於て酒を禁じ、路を緩々と馳て今日此處に着しぬ。汝はもと此村の人なれば、定て酒店の主も知音ならん。宜しく一樽を具へしめんや。我今日ばかり先禁酒を破るべし。朱貴が云ふ、此酒店は乃ち我弟朱富が家なりとて、則ち呼出しまみえしめければ、朱富遂に出て李逵に對面し、早速酒肴を設けて款待ける。李逵が云ふ、宋長兄再三我に命じ酒を飲べからずと禁め給ひしかども、今日日は曲て三盃を酌べしとて、まづ盃を取て飲酌を始め、已に日も晩はや三更過四更の時に移りしかば、李逵盃を收しめて云ふ、月明なるに乗じて、宜しく百丈村に馳すべし。朱貴が云ふ、汝必ず小路より行ことなかれ、只よく東の大路を過て直に百丈村に至り、速に老母を取つて早く山陣に歸り給へとて、再三此ことを叮嚀にいふにぞ、李逵が云ふ、小路より行時は道甚だ近し、何ぞ大路を過らんや。朱貴が云ふ、小道の邊には所々に險しき山坂有つて虎多し。又剪徑する賊あり。しかじ大路の遠きを行んには、是全く無事ならん。李逵が云く、我なんぞ虎と賊とを怖るゝことあらんとて、終に朱貴兄弟に別れ、直に小路より馳せけるに、五更の時もはや立て天色曉んとす。李逵又數里の路を過て、前面を望みるに、深林の内より一人の大漢子跳出て、李逵に向て云ふ、汝此路を過らんには、速に若干の錢を留めて、路を買て過るべし。若し買路錢なくば、決して通すまじ。李逵此賊を見るに、雙の手に二ツの斧を持て面の色は墨よりも黒し。李逵大に怒て云ふ、汝何奴なれば此所に徘徊して剪徑をな

すや。彼漢子が云ふ、汝もし我が名を聞ば、忽ち恐懼して魂を飛し膽を落すべきぞ。我は是豪傑の譽れ高き、黒旋風李逵と云ふ者なり。汝衣を脱て悉くさし置行ば、肯て汝が命は饒さん。李逵是を聞て大いに咲つて云ふ、汝はもと何らの奸賊なれば、敢て我が姓名を假するや。黒旋風李逵といふは、乃ち我ことなり。汝ら手段を見せんとて、朴刀を揮て斬てかゝる。彼漢子大いに驚き、戦ずして逃んとせし處に、李逵早くも衝入て地上に踢倒し、則ち胸を踏踏怒り罵て云く、汝妄りに我姓名を穢すこと、萬死に當る罪なり。彼漢子が云ふ、某も姓は李たりといへども、眞の黒旋風にあらず。君はもと大名を天下に振ひ給ひて、萬人皆怖をなすゆゑ、某妄りに君の大名を假て、乃ち此所に在つて剪徑をなす。人皆黒旋風の三字を聞時は大に慄て行李を棄て逃走る。此ゆゑに人命を害せずして貨を得るのみ。某が實の姓名は李鬼と云うて、此前村に居住す。李逵益怒つて云く、汝擅に二ツの斧を使ふはいかん。我今汝に一ツの斧を與へんとて、遂に右の手に持たる斧を奪取て、幾乎に打掛んとせし處に、彼漢子大に慌て告げるは、君もし我を殺し給はば、外に又罪なくして死する者あらん。李逵が云ふ、我今汝一人を殺さん、外に死する者有んと云ふはいかん。彼漢子が云ふ、某もと剪徑をなしたることはなけれど、唯恨らくは家貧うして一人の老母を養ふこと能はざるゆゑ、頃日妄りに君が大名を假て人を赫し、専ら其行李を奪ひ取て老母を養ふ。君もし某を殺し給はば、老母は竟に飢死すべし。伏して望らくは一點の仁心を垂給へとて、潜然として涙を流す。李逵は原人を殺すこと

を樂とする豪傑なれども、柔弱を助け老衰を憐む心、元來十倍して厚ければ、今彼漢子が詞を聞て暗に想道、我偶母を邀へ取らん爲故郷に回り、もしかく孝道を盡す者を殺さば、天地必ず我を惡み給ふべし。我先是を免さばやとて、則ち彼漢子を扯起して云く、我汝が孝を盡すを感じて、今一命を免すなり。自今以後必ず我姓名を塵すことなかれ。彼漢子が云ふ、某今日より業を改めて清淨の營をなし重て君の大名を汚すべからず。李逵が云ふ、汝かく孝順の心あり。過ちを知て改めば乃ち汝が福なり。我肯て汝に惠まんとて、一錠十兩の銀取出しこれを與へければ、彼漢子地上に拜伏して大に感謝し、遂に別れて林の内に入にけり。李逵自ら打笑ていはく、彼不幸にして我に遇定て一興を失ひつらんとて、又朴刀を提げ山坂の上に馳上り、時はや巳の上剋に至りしかば、李逵酒食を求めんと欲して左右を見るに、只一間の酒店もなし。百歩ばかり行て遙山の凹に一軒の草屋を見かけ、李逵飛がごとくに跑て、遂に其屋に至りし處に、内より一人の女出て問けるは、貴客はいづれより來り給ひしぞ。李逵が云ふ、我は是過路の旅人なり。酒食を求めんが爲こゝに至れり。我今一貫文の錢を汝に與ふべければ。我爲に酒食を調んや。彼女が云ふ、此里には酒を求め所なし。飯のみならば我自らこれを調へて進らすべしとて、頓て内に入りければ、李逵は又家の後に繞出て此邊を遊覽しける處に、一人の漢子此家を望で歸り來りしかば、李逵急に身を隠し伺ひ見るに、内より又彼女出でて云ひけるは、丈夫は何ゆゑ遅く歸り給ひしぞ。彼漢子が云ふ、今日は不慮に死を免れて再び汝に遇なり。女大いに

驚きて云ふ、常には悦んで回り給ふに、今日は何らの禍に遇ひ給ひてかくは云ひ給ふぞ。彼漢子が云ふ、今日一人の旅人に遇ひ、必定利を得んと思ひしに、あに料んや、其旅人は是眞に黒旋風李達なりしに、我是をしらずして黒旋風の三字を以て赫しければ、彼大いに怒り、忽ち我を踢倒して殺さんとせしゆゑ、我詐て老母を養はん爲剪徑をなし、大名を穢せりと涙を流し告げれば、彼全く是を信じ、我命を饒すのみならず、一錠十兩の銀を恵みぬ。彼女忽ち低言て云ふ、聲を高め給ふな。今我家に一人の大漢子來つて則ち門前にあり。大夫暗に彼を窺ひ見給へ。若彼漢子黒旋風にもあらば、蒙汗藥にて彼を害し給へと、夫婦議を定めぬる處、李達此言を聞き大に怒り思ふやう、彼が孝を感じ銀を恵みしに、却て我を害せんと圖る。恩を知らぬ小人ぞとて、跳出唯一足に踢倒し、腰刀を抜て頭を刎ね、内に入つてみれば、女は遂にみえず。家には竹籠に舊衣裳と碎銀少し。李鬼が身の肉を割で、炙肉と銀あり。是を取集め一つ、みとし、三升の米飯熟したれども菜蔬なし。李鬼が腿の肉を割で、炙肉とし、是を以て飯を多く吃し、一把の火を放て屋を焼拂ひ、李達は直に百丈村を望で馳行けり。李達は遂に百丈村を望で馳行き、暫しの間に我家に至つて母を見るに、母は兩眼瞎れて床の上にありしかば、李達はを恠んで云ひけるは、李達回りぬるに、母は何ゆゑ眼を開て見給はぬぞ。母是を聞いて、半は悦び半は哀みて云ひけるは、汝久しく異郷に在つて禍を免がれるが、今日は何ゆゑ又回りたるや。我汝が事のみ常々悲しみ、兩眼をも已に哭瞎して開くこと能す。我此間貧しきと病との兩苦に逼

りしこと言はずともこれを知べし。然れども汝が兄能く清貧を守て、邪のこをなさぬゆゑ、我頗る心を安んじて是を悦ぶのみ。汝縦ひ何等の艱難を受るとも、必ず非道のことをなして徳を傷ふことなかれ。只しらす汝は今何れの所に在りや。宜しく我に告て心を安んせしめよ。李達これを見て心中に思ひけるは、我母は本老實の人なれば、われもし梁山泊に在りといはば、必定悦び給ふまじし。かし先づこれを詐んにはとて、則ち答て云ひけるは、我今大なる幸ひを得て官職を授かれり。此ゆゑに我此度母を邀へん爲、自ら家に回りぬ。母是を聞て大に悦んで云く、汝已にかくのごとくんば莫大の福ひなり。我敢て汝が請に應せんと思ふ、須く兄が歸るを待つべしと、未だ云ひも終らざるに李達はや歸りければ、李達則ち拜して云ふ、長兄久しく遇ざりしに彌恙なきや。李達大いに怒て云く、汝何ゆゑ回りしぞ。又來つて我を苦しめんと思ふや。母が云く、李達今は官職を授つて、我を邀んが爲家に回りぬ。汝率爾に怒ることなかれ。李達が云ふ、母必ず彼が言を信じ給ふな。彼昔日人を殺して若干の禍を我に被らしめ、頃日又梁山泊の強盜らと通同して、共に斬罪人を奪ひ取り、大いに江州を鬧して軍民を殺し、今彼は梁山泊に在つて専ら民を害し人を傷ひ、九族滅亡の大罪を犯す。是に依て文書諸國に行はれ、緊しく彼を搜し求む。我又いかなる連累を蒙むらんも料りがたきに、汝李達早々梁山泊に往て、再び家に回ることなかれ。汝若し遅々するに於ては、我速かに汝を捉へて、官司に送るべきぞ。李達が云く、長兄何ぞ怒り給ふや。只宜しく我に隨つて山陣に上り給へ。我よ

く長兄を樂しましめん。李達大に怒り、汝何ぞかく大膽なるやとて忽ち門外に走り出ければ、李達想道彼今門外に出たるは、必然我を捉へんと、友を語らふならん、しかし早く馳回らんにはとて、則ち一錠五十兩の大銀を床の上に遺し置て云く、我兄は原家貧うして、終に五十兩の銀を見たることなし。彼再び回て、此銀をみば、必ず悦んで我を追ふことあらじとて、遂に母を背に負て小路の上

黒旋風沂嶺に四の虎を殺す

李達は隣家の人、十四五人を催し、再び家に入て李達を捉へんと計りし處に、はや母も李達も見えざりけるに、只床の上に一錠の大銀ありしかば、李達心中に察して云ふ、李達今此銀を遺したるは、必定梁山泊より人大勢來つて、母を山陣に携へ行しに疑ひなし。若跡を慕うて追蒐ば、却て一命を害せられん。只よく穩便たるべしとて、衆みな退散したりけり。扱李達は猶李達が追來ることもや有らんと恐れ、只顧亂山嶮地を擇て走り行く。已に嶺下に至りて、みすく天色晚しかば、李達心中に思ひけるは、嶺下に至てみれども、李達いまだ見えざるは、必定追ことを休つらん。然れども此處は沂嶺と云て嶮阻の惡所なれば、夜の更ざる先に一足も早く急がんとて、老母を背に負て忙はしく嶺上に登り來る。母は目盲たれば道の險惡も、時刻の明闇もさだかに知りがたし。母が云、我甚だ渴す。水を求めて飲しめんや。李達が云ふ、先暫く待給へ。嶺を過て人家ある所に至りなば、茶をも飯をも進

すべし。母が云ふ、我今口中に半點の渇ひなうして、渴に勝がたし。汝唯須らく嶺上に登つて水を求め飲しめよ。然らずんば今我實に渴し死なん。李達これを聞いて、漸嶺上に登り、母を青石の上に御し置て云けるは、母暫くこゝに在て待給へ。我少刻水を尋ね來らんとて、遂に澗の内に入り水を求めとしけれども、一ツの碗瓢もあらざれば、まさにこれをいかせんと、東西を望み見るに、山の頂きに一ツの草庵見えければ、李達大に悦び、急に跑上りて庵中をみるに、一個の人もあらずして四方盡く頽敗れ、幸ひ佛前に一ツの香爐有しかば、李達頓てこれを取、再び溪邊に下つて、一香爐の水を昏取、又嶺上に登つて青石の上をみるに、母ははや見えざりけり。李達是を見て、心甚だ疑ひ能々みれば、血こぼれて道をつたひみえければ、其血の跡を遡うて一向尋ね行きし處に、一ツ大いなる洞の口に至りて其内を見るに、二ツの小虎あつて人の腿を噉ふ。李達心中に想ひけるは、我此たび母を山陣に邀へて樂ませんと欲し、漸此所まで背來りぬるに、却て虎に噉れけるこそ遺憾なれ。彼小虎が噉ふ人の腿、若我母の腿にあらずんば、是誰が腿ならんや。我今此虎を殺して母の仇を報はんとて、忽ち鬚を倒に堅て、遂に彼小虎二疋を斬殺し、又親虎を尋ねて暫く徘徊しける處に、山坡の邊より一ツの母虎大に吼て狂ひ來りしかば、李達急に腰刀を揮て又母虎が頭を斫劈けり。かゝる處に俄に松の樹の蔭より、一陣の恠風起り、木の葉を吹散して恰も雨のごとし。李達忙はしく是をみるに、又一ツの大虎跳出て直ちに李達を望んで狂ひかゝる。李達少しも怕れず、又腰刀を振うて相迎ふ。彼大虎牙

を張爪を舞して跳入し處に、李逵傍に閃りとて避て勇力に任せ打つ刀、早くも虎の眉間に斬込しかば、彼虎霹靂の如くに吼り、遂に身揮ひして死にけり。李逵暫時に四虎を殺し、猶洞の邊に至り、良久しく捜しけるに、漸氣力疲れしかば、再び彼草庵に入りしが、愁涙に眼も合す。翌朝洞に至て母が腿其外骨を拾ひ包袱に裹泗洲大聖庵の後の土を穿て、彼骨どもを埋め愁傷に堪難つ、嶺を過て馳來りぬる處に、五七人の獵戸都て此所に在て弓箭を携へけるが、忽ち李逵を見て大いに驚き則ち問て云ふ、汝は是山神にはあらずや。いかんぞ只だ獨此嶺を過て來りぬるぞ。李逵答て云ふ、我は是れ旅人なり。昨夜母を携へ此嶺を過りけるに、母再三水を求めぬるゆゑ、我母を嶺上に安置して溪に下りし處に、豈知らんや、虎來て母を食ひぬ。此ゆゑに我洞の邊に尋行て、兩の小虎と二疋の大虎とを殺しぬ。獵戸らこれを見て、都て信せずして云けるは、汝一人の力を以て豈よく四の虎を殺さんや。古の李存行と子路とは、共に是勇力たりといへども、只一ツの虎を殺しぬるのみ。此嶺の二疋の大虎は尋常の虎と同じからず。我が輩官司の命を受け、彼虎を殺さんと圖れども未だこれを得ず。汝假令鐵石の人たりとも、焉ぞよく四ツの虎を殺さんや。李逵が云ふ、汝もしこれを信せずんば、我汝らを引て死虎を看すべきぞ。獵戸らが云ふ、汝實に虎を殺せしならば我重く汝を謝せんとて頓て胡哨を吹しかば、片時の間に五六十の獵戸ら、四面八方より馳集り、即ち李逵に隨つて嶺上に上り、遂に洞の邊に至て此處をみるに、果して四ツの虎斬殺されてありければ、諸人大に悦び頓て四ツの虎を擡て、村に下り

し處に村中の貴賤悉く出て李逵を迎へ、直ちに曹太公と云ふ者が館に導いて宜しく李逵を款待けり。曹太公乃ち虎を殺したる所以を問しかば、李逵始め終り詳かに語りけるに、諸人は是を聞て衆皆大に驚きぬ。曹太公又李逵が姓名を問ひければ、李逵詐て云ふ、某姓は張にて諱はあらず。人皆我を稱して張大膽と云習はせり。曹太公が云ふ、誠に大膽の勇士なり。若かくの如き大膽にあらずんば、いかにぞよく四ツの虎を殺さんやとて、いよく奔走を盡しけり。此時村中の男女盡く曹太公が館に至り、都て群を成し隊を曳て死虎を見物す。こゝに又李逵に殺されたる彼の假李逵が妻は、彼日此村に逃來つて、父母が家に在けるが、此日諸人とともに、曹太公が館に至つて虎を見物し、不圖李逵が堂上にあるを見て大いに驚き、彼虎を殺したる漢子は、正しく我夫を殺したる黒旋風李逵なり。宜しく父母に告て、夫の仇を報はんと思ひ、忙はしく家に歸て、父母に告て云けるは、彼虎を殺したる大漢子は、則ち我が夫の仇人梁山泊の賊黒旋風李逵なり。我が爲に彼を害し、夫の仇を報はしめ給へ。父母是を聞て大に駭き慌て來つて里正にかくと告しかば、里正是を聞て云けるは、其黒旋風李逵と云ものは昔日百丈村にて人を打殺し、其後又江州にて官軍を多く殺して大罪を犯し、江州府より彼を尋ぬること最も嚴なり。もし彼を捉へたらん者には、三千貫の賞錢を賜はらんとなり。彼今當村に來れるこそ幸なれ。暗に曹太公を呼で商議せんと、遂に人を馳ければ、曹太公頓て里正が家に至る。里正則ち曹太公に告て云けるは、今虎を殺したる勇士は、昔日百丈村にて人を殺し、頃日又江州にて罪を犯せし、

黒旋風李逵と云ふ者なるよし、今官司より彼を捉へんとすること嚴重にして、已に三千貫の賞錢をかけて彼を求む。願はくは曹太公宜しく商量し給へ。曹太公はいはく、さては彼勇士は官司の欲捕者なりとや。然らば彼を捉んこと尤も易かるべし。然れども萬一人差をせば、却つて禍を惹出すに似たり。先詳らかに其實を糺し其後彼を捉ふべし。里正が云ふ、今此所に一人の女あつて能く彼を見知り。此女は原李鬼と云し者が妻なり。前日黒旋風李逵曾て李鬼が家に來つて、酒食を求めけるが、何のゆゑもなく、李鬼を殺して、屋を焼しとなり。曹太公が云ふ、彼果して黒旋風に違ひなくば、計を以て捉ふべし。其計はかくのごとくくと低言ければ、衆皆大に悦んで神妙の策なりと同じけり。曹太公は再び家に歸り、李逵に對して云けるは、豪傑先寛りと座して、酒を酌給へとて、新たに酒宴を設けて再び飲酌を催し、諸の獵戸ら再應李逵を勸めて、大盞にて飲しめけり。曹太公又李逵に對て、豪傑此虎を官司に送て恩賞を乞ひ給はんや。李逵が云ふ、我は是路を急ぐ旅人なれば、恩賞を乞ふとせず。只一剋も急に打立べし。曹太公が云、いかんぞ敢て豪傑に謝せざらん。少剋村中より錢財を湊て送るべし。彼虎は又自ら官司に獻せんと、未だ云も了らざるに、村中の獵戸ども悉く酒肴を携へて李逵に送り、一々盞を取て相勸む。李逵夢にも計とは知ずして、擅に大飲し、宋江が示しぬる言語全く是を忘れ、約莫二時ばかりにして、李逵大いに爛醉し、前後不覺の體にみえければ、諸の獵戸ども頓て李逵を扶け、椅子の上に座せしめ、則ち二筋の大索を以て、恰も粽のごとくに李逵を綁め

けり。此時曹太公は里正ら、若干の人を縣裡に馳て誣しめ、又李鬼が妻をも同じく縣裡に遣はしけり。知縣此事を聞て大いに驚き、即ち里正どもに命じけるは、黒旋風李逵は、謀叛人の同類なれば尋常の罪人と一列ならず、必ず鬆せにしてこれを逃すべからず。里正らが云ふ、李逵原勇力の豪傑なるゆゑ、若誤つて取逃すこともやあらんと思ひ、未だ縣裡に送らず。まづ千筋の索を懸曹太公の家に置て、緊しく是を守らしめぬ。知縣これを聞、早速當縣の都頭李雲と云者を廳前に呼で命じけるは、沂嶺下の曹太公と云ふ者が家に、黒旋風李逵を捉へ置けるが、汝多く人を引て彼地に赴き、李逵を監押して縣裡に引來るべし。必ず村里を圍がしめて彼を逃すことなかれ。李雲命を奉て廳前を退き、頓て三十人の土兵を催し、各軍器を持ち直ちに曹太公が家を望んで馳來りぬ。此沂水縣は本宅き所なれば、今李都頭馳向て、李逵を縣裡に引渡すこと、諸人皆是を傳へ聞て、其沙汰専らなりしかば、朱貴此消息を聞て大に驚き、舍弟朱富に對して云けるは、黒旋風果して禍ひを惹引し、已に今活捉れけるに、いかなる計を以て彼を救はんや。宋公明彼が禍を引出さんことを恐れ給ひ、乃ち我を此所に遣はして、消息を聞しめ給ひぬるに、我もし彼を救はずんば、何の面目あつて再び山陣に歸らんや。朱富が云ふ、長兄先我言を聞給へ。彼都頭李雲は原來武藝の達人にて、四五十個の人たりとも彼に敵すること能はず。我ら兄弟兩人空しく虎の勇みをなすとも、いかんぞよく彼に敵せんや。もし李逵を救はんと思ひ給はば、唯智を以て取べし、力を以て取べからず。幸ひ李雲某を愛し、常々某に鎗棒

を指南す。これによつて某一ツの計あり。今晚二十斤の肉と十四五樽の酒とを調へ、其内に蒙汗薬を入れ、我長兄とともに半途に出て李逵を待、彼已に李逵を引て至りなば、我彼に酒肉を進めてこれを用ひしめ、衆人悉く毒に中らん時、我輩其便機に乗じて李逵を救ふべし。しらす此計はいかん。朱貴が云く、此計極めて神妙なり。宜しく速にこれを行ふべし。若李逵だに救ひなば、汝も共に梁山泊に入り、同じく富貴を娛しめ。朱富これを聞て其言に服し、則ち又商議して云く、我輩果して李逵を救ひなば、半途より直に山陣に上るべき間、豫じめ妻子資財を車にのせ、先道中に出して待しめんとて、頼て妻子どもを車にのせ、則ち兩人の家僕を従はしめ、其夜三更の時に、はや道中に遣はして、消息を待しめけり。已にして朱貴兄弟兩人は酒肉の内に蒙汗薬を入れ、數箇の人にこれを持しめ、已に半途に打出けるに、時はや五更も過て天色漸明る處に、忽ち金鼓の聲響て、二三十の士兵ども李逵を監押し引來る。李雲は一乘の轎に座して相従ふ。諸の士兵どもはや朱富が前に至りしかば、朱富頼て相迎へて云けるは、某老早此所に出て、都頭を待わびぬとて、自ら一盃を捧げ、轎の邊に至りし所に、李都頭急に轎を下てこれを謝して云く、賢弟何ゆゑかく感愍にこの所まで出迎へ給ふや。朱富が云ふ、某聊か一點の誠を表すのみ、何ぞ敢て謝に當らんや。李雲遂に盃を取て、其半を飲で半を剩しければ、朱富再三強けるに、李雲はもと酒量淺きゆゑ、しきりに辭してこれを飲す。朱富又一塊の肉を取て獻じければ、李雲其感愍なるを感じて是を吃せり。朱貴又盃に酒を醜肉

を添て諸の士兵らに與へ、一々これを飲しめけり。此時李逵は朱貴兄弟がかく行ふを見て、其計策たることを知り、故意詐て云けるは、汝ら何ぞちと我にも與へて飲しめざるや。朱貴責て云く、汝は大罪人なり。何ぞ酒肉を汝に與へんとて、甚だ悪々しく答へけり。扱李雲は士兵らを見て呼はりけるは、汝らはや路を急ぐべしと、未だ云も終らざるに、士兵ども都て手癱足癱れ、盡く一度に倒れしかば、李雲是を見て我計に中りぬるよなとて、已に刀を抜んとせし處に、覺えず己も渾身癱れ、同じく地上に倒れけり。朱貴朱富各刀を揮て、酒肉を吃せざりし者どもを、四面八方へ追散し、遂に五人を斬伏ぬ。李逵此體を見て、勢ひに乗じて呼はりし處に、絆の索一度に破落離と斷しかば、李逵士兵らが刀を奪ひ取り、李雲を望んで斷てかゝる。朱富急にこれを扯住て云ふ、必ず李雲を殺したまふな。此人は我が爲には武藝の師にして人となり尤も好し。汝は先これを棄て、一向先に行給へ。李逵答て云ふ、我もし曹太公を殺さずんば、いかんぞ此冤を雪んと、飛がごとくに追かくる。此時曹太公里正、ならびに李鬼が妻等は李雲に従て此所まで來りけるが、今李雲らが毒薬に中りしを見て、急に逃走らんとせし所に、李逵電のごとく追來つて、つひに曹太公、里正、李鬼が妻等悉く斬殺し、其外二三十人の獵戸ども、過半李逵が手の下に斬殺されけり。朱貴朱富兩人は忙はしく李逵を呼で云けるは、我輩速に山陣に回るべしとて、已に小路を臨で半里ばかり馳ける處に、朱富忽ち嘆じて云けるは、我師李都頭は人となり尤も善なるに、我が計に落され、縦ひ酒毒醒たりとも、いかんぞ再び知

縣に見えんや。必定後を慕うて我輩を追蒐べし。我は原來彼が懇志を蒙りしことなれば、獨り此所に待て宜しく諫めを加へ、ともに梁山泊に誘引すべし。朱貴が云ふ、汝が言尤可なり。彌諫言を盡して、必ず山陣に誘引せよ。もし然らずんば彼却つて知縣に罪せらるべし。惜しいかな一人の豪傑何ぞ空しく是を殺さんや。李逵長兄は此所に留つて、朱富を助け給へ。我はまづ馳て家族らが車に跟べしとて、遂に兩人を此所に留て、朱貴は先車を追て急ぎけり。李逵朱富兩人は此所に留て已に一時計待居ける處に、果して李雲刀を輪して飛が如く追來り、大音聲に呼つて云けるは、強賊走ることなかれ。李逵此勢ひの猛きを見て、同じく刀を揮て躍り出で、遂に兩人鋒を交へて相戦ふこと已に八九合に至りけれども、更に雌雄分たざりし處に、朱富刀を入れて兩人が間に隔り、乃ち呼つて云けるは、兩人の豪傑まづ戦を休て、我が一言を聞給へ。兩人これを聞き忽ち雙方へ分れしかば、朱富先李雲に對して慇懃に云けるは、某曾て都頭の愛憐を蒙りて、鎗棒を學びしかば、平生洪恩を感ずること淺からず。然れども我兄朱貴今梁山泊にありけるが、宋公明の命を受て李逵が消息を聞んため此所に至りけるに、李逵已に活捉れ、縣裡に送られんとす。もし是を救はずんば、いかに再び回つて宋公明にまみえんや。是に依て是らの計を行つて都頭を誑きぬ。先に李逵都頭を殺さんとせしかども、某是を制して手を動かさず、只士兵らを殺したるのみ。某らもし急に逃走らば、今時分は若干の路を過るべし。然れども我都頭の厚恩淺からざるを感じけるゆる、故意此所に控て都頭の趕來

り給ふを待受ぬ。都頭もと知見明らかなる人なれば、言すとも知り給へ。今已に李逵を走らしめ給ふのみならず、剩へ許多の士兵らを失ひ給ひぬるに、いかにぞよく再び回つて、知縣にまみえ給はんや。若再び回り給ふならば、必定知縣より罪せられ給ふべし。しかし今日某らとともに梁山泊に入給ひ、晁天王宋公明とともに義を結び給へ。是則ち萬全の計なり。しらす尊意はいかんの。李雲是を聞いて暫く沈吟して云、賢弟の諫は可なりといへども、只山陣に我を留むまじ。朱富笑つて云ふ、都頭何ぞ山東の及時雨宋公明の名を聞給はざるや。彼人専ら賢を招き士を納め、天下の豪傑と盟を結び給ふ。いかにぞ都頭を容ひざらんや。李雲是を聞嘆息して云ふ、我今家あれども奔り難く、國あれども投がたし。只悦ぶらくは、我いまだ妻子あらざれば官司に恐るゝ所なし、我肯て汝とともに梁山泊に赴くべし。李逵是を聞忽ち打笑て云けるは、都頭いよ、山陣に上り給は、則ち自家の兄弟なりとて、互に禮を行ひ、三人同じく車を追て馳行しに、半里ばかりに至り、朱貴相迎へて大いによるこび、四人の豪傑齊しく車に跟て急ぎしかば、はや梁山泊も近かりし處に、馬麟、鄭天壽出迎へて云けるは、晁宋兩頭領未だ全く心を安んじ給はず。我輩を下して足下らの消息を探聽しめ給ふ。今已に恙なく回り給ふ上は、我ら兩人は先山陣に回りかくと訴へしとて、兩人の頭領は先へ山陣にかへり、次の日四人の豪傑ら遂に山陣に上り聚義廳に至り、朱貴先李雲を引て晁宋兩頭領にまみえしめて云けるは、此人は則ち沂水縣の都頭姓は李名は雲綽號は青眼虎と申なりとて、次に朱富を引て同じく諸頭領に見

えしめ、この者は某が弟朱富紳名は笑面虎と申なりとて、始終のことを語りければ、李達も又假李達を殺し、ならばに四ツの虎を殺したることども、くはしく語り、各一笑を催しけり。晁宋兩頭領打笑つて云けるは、李達は四個の猛虎を殺されしかども、今日山陣には又兩個の活虎を添たりとよろこびて、大いに酒宴を設け飲酌を始めけり。時に吳用進み出て申けるは、今山陣甚だ繁昌し、四方の英雄風を望で馳加はる。これ皆晁宋兩長兄の徳なり。近來山陣の事業尤大にして、舊日に同じからず。猶須らく三ヶ所に酒館を設け、専ら世間のことを探聴しめ、預じめ先官軍を防ぐの計を備ふべし。乃ち西山の方には、童威童猛に十餘人の山兵を添て酒肆を開かせ、又南山の方には李立に十餘人の山兵を與へて酒肆を建しめ、北山の方には石勇に十餘人の山兵を従はしめ、酒肆を設けしめ、都て朱貴が酒店のごとく水亭を修補、則ち號箭を體さしめ、其用事を辨すべし。又山前にも大關を設け杜遷にこれを守らしめ、又陶宋旺に港を掘せて水路を修理せしめ、又蔣敬には一山の勘定を掌とらせ、蕭讓には一山の關文等を掌とらせ、金大堅には圖書印信兵符等を雕しめ、侯健には鎧衣袍旗號等を造らしめ、李雲には一山の房屋を掌とらせ、馬麟には大小の兵船を造らしめ、宋萬白勝には金沙灘に陣を張しめ、王英鄭天壽には鴨嘴灘に陣を張しめ、穆春朱富には陣中の兵糧を掌とらせ、呂方郭盛には聚義廳を守らしめ、宋清には専ら筵宴のことを掌とらせ、已に一々分撥定りしかば、諸頭領先聚義廳に會合し、一連に酒宴をなして、山陣大いに熱鬧ひけり。これより梁山泊には晝夜只軍の蒐引、

戦ひの勝負等の事のみ學んで怠らず。官軍はや來れかし、一々塵にして目に物見せ賊官らが肝を飛ばしめんと、拳を捏て待佗けり。一日宋江は晁蓋、吳用其ほかの諸頭領と閑談して云けるは、我輩今日都て大義にあつまるといへども、獨公孫勝いまだ回らず。彼向に約諾し、四五月のうちに必ず歸山すべしと云しに、今已に若干の日を経ぬれども、曾て消息なきは必然迷ふ所あらん。願くは戴院長公孫勝が家に赴きて、彼が虚實を探聞よろしく誘引して來らんや。戴宗聞て早速に應すべしとありければ、宋江大いに悦び、果して戴院長行ならば、必ず旬日の内には其消息を聞べしとて、其日は衆皆聚義廳を退散しけり。翌日戴宗は旅装をなし梁山泊を離れ、彼四ツの甲馬を双の腿に拴着、遂に神行の法を行つて飛がごとくに走り去、直ちに蘇州を望んで進發し、已に路を行くこと三日にして沂水縣の界に至りけるに、人々舉て黒旋風李達が取沙汰區々なれば、戴宗これを聞て、心中に冷笑つて過りけり。扱是より飲馬川の山陣に、又強盜あつて小賊を集め、頭領聚義廳を設け寨を構ること、次卷を見るべし。

論者いはく、前の編武松が景陽岡にて、醉後虎を殺す段に、獵戸どもが驚て云詞、并に、此虎は尋常の虎に異なりといふ。又信せずして其場に至て果して死虎を見る。彼は里正の宅にて管待、是は曹太公の館へ導く、事は別にして趣向大いに似たるかな。又朱貴、朱富、李達を救ひ、都頭李雲共に朱富が眷屬を載たる車に跟て、沂水縣より梁山泊へ三日のほどに行着とみゆ。然るに戴

宗公孫勝を尋るに、梁山泊を立て三日行て、沂水縣を過るとありては、梁山泊より沂州の道程分別しがたきものか。神行の法にて、一日八百里を行戴宗も、三日とは神行の法あることを此所に至て作者忘却しけるにや。

四編卷之十

錦豹子小徑にて戴宗に逢ふ

戴宗偏に蘇州を志し沂水縣にかゝりて行く處に、遙か對面より一人の漢子來りけるが、戴宗の走ること疾きを見て、即ち呼んで云けるは、神行太保何れに往くや。戴宗これを聞て、忙しく頭を擡て此人を見るに、頭圓く耳太く鼻直にして口方に、眉清く目秀て相貌ことに文雅なり。此時戴宗問ていはく、某かつて豪傑の尊顔を識認す。いかんぞ我名を呼給ふや。彼漢子答ていはく、足下は果して神行太保にてましますかとて忽ち地に跪て禮をなす。戴宗急に禮を回して云、足下の高姓大名はいかん。彼漢子答て某姓は楊、名は林綽名は錦豹子と申す。某數月以前に、道中の酒店に於て公孫勝先生に遇ひ、梁山泊の晁宋兩公今専ら賢を招き、士を納め給ふことを承り、某も山陣に身を倚んと願ひける處に、公孫先生一封の書簡を修へて某を山陣に薦め給ふ。然れども某猶未だ山陣に赴かず、其ゆゑは至りても只山陣に何等の掛礙あつて、某をとゞめまじきことを恐れてなり。彼日公孫先生諸の豪傑のことを語り給ひし時、足下のことをも詳に聞けるに、一日の内に八百里の路を行き給ふとなり。某今足下の路を行給ふをみるに、尋常の人の及ぶ所にあらざるゆゑ、若は神行太保にてあらんやと思

ひ、敢て大名を呼けるに、果して長兄の光臨なること、某莫大の幸ひなり。戴宗が云、則ち彼公孫先生蘇州に回りにより以來、曾て消息なきゆゑ、晁宋兩頭領朝夕これを渴想し、則ち今某を蘇州に遣はして公孫先生を訪はしめ、早速誘引して山陣に歸るべきとのことなり。これに依て、某今命を奉て今日こゝに至り、想はず足下に見えしこと、奚啻雀躍のみならんや。楊林が云、某は本彰德府の産たりといへども、蘇州の地に於ては知らざると云所なし。若長兄我を奔給はずんば、某あへて同往すべし。戴宗が云、足下敢て同行し給は、某何よりの幸ひなり。若公孫先生に尋ね遇なば、三人早速山陣に回るべし。楊林これを聞いて大いに悦び、則ち戴宗を拜して兄弟の義を結び、其夜すでに旅宿を求めて歇みしかば、楊林自ら酒肴を具へて、戴宗を款待けり。翌朝未明に兩人已に旅宿を出て路に臨みける所に、楊林戴宗に對して云けるは、長兄は神行の法を行うて、一日の内には八百里の路を行き給ふに、某あによく長兄に從はんや。某は必定數日後れ、蘇州に至るべし。戴宗打笑つて云、我が此神行の法は又よく賢弟を走らしむ。乃ち四ツの甲馬を分つて、二ツは汝の腿に拴着、同じく神行の法をなして走る時は、我とともに齊しく快し、若し然らずんば汝いかんぞよく我に追付んや。楊林大に悦び、頓て二ツの甲馬を雙の腿に拴着し處に、戴宗遂に神行の法を行うて馳ゆきしかば、兩人宛も空を飛がごとくにして、はや一ツの高山を望みぬ。楊林が云、此所は飲馬川と云地なるが、山中には原來強盜の頭領あつて、若干の人馬山陣を守る。只知らず頃日はいかゞしたるやらん。戴宗これを聞いて

云く、此山の勢ひ極て猛惡なり。頃日たりともなとか人馬のなからんやと、未だ云も終らざるに、忽ち金鼓の聲大いに響て、二三百の小賊馳出て、當先に兩人の頭領各刀を揮て、大音聲に呼はりけるは、汝二人は何者なるぞ、速に路を買て過るべしと。楊林呵々々と打笑て云けるは、汝あへて路を賣ば、我鋒さを以て買べしとて、刀を輪し斬てかゝる。兩人の頭領忽ち地上に跪きて楊林長兄にはあらずやと呼はりしかば、楊林これを見て大に悦び、急に扶け起して禮を還し、則ち戴宗を請て見えしむ。戴宗問て云、此豪傑は誰なれば賢弟を見知りぬるや。楊林答て云、我を識認たる豪傑は、原蓋天軍襄陽府の人にして姓は鄧、名は飛、名は火眼狻猊と號す。我と彼とは兄弟の義を結び、多年一所に在りしかども、五ヶ年以前に別れて後は、かつて音耗も通せざりけるに、想はず今日此處にて參會すること、縁の絶ざる處なり。鄧飛も又楊林に戴宗がことを問て云、彼長兄は誰なるや。必定等閑の人にあらし。楊林が云、此長兄は是梁山泊の英雄神行太保戴宗と云人なり。鄧飛を聞て忽ち拜伏して云、某久しく大名を聞き及びぬるに、今日何の幸ひにや尊顔を拜す。戴宗重て鄧飛に問て云、彼豪傑は亦何人ぞや。鄧飛答へて云、彼は我が義弟孟康と云者なり。原真定州の産にして、譚名を玉幡竿と號す。戴宗是を聞て大いに悦び、四人同じく閑談良久しくして後、楊林又二人の頭領に問て云、汝兩賢弟此山に安身すること、幾年を経ぬるや。鄧飛がいはく、我が輩此山に來つて一年餘りなり。此半年以前に又一人の豪傑を得ぬ。此豪傑は原京兆府の人にして、姓は裴名は宣と申。昔日六案孔目

をなせし人なり。最も能く鎗を拵り棒を使ひ、劔を舞し刀を揮ふ。其人となり忠直にして一點も邪の心なし。これによつて人皆鐵面孔目と諱名せり。向に當府の知府に無實の罪に陥され、乃ち沙門島に流されんとし、此所を過りけるゆゑ、我ら兩人山を下つて監押の下官兩人を斬殺し、遂に表宣を留て山陣に在しめ、凡二三百年の馬を聚めて共に此山を守り、年長たるによつて山陣の主を表宣に譲りぬ。願くは兩長兄片時山陣に上り給ひて表宣にも遇給へ。戴宗楊林大に悦び、頓て兩頭領に隨つて山陣に上りけり。時に表宣出迎へて、聚義廳に至り、各禮畢つて座已に定りし所に、頓て酒宴を進め、盃を飛せ酒數巡に及びければ、戴宗先晁蓋宋江が今専ら賢を招き士を納め、天下の豪傑と義に聚ることを告げ、表宣ら三人をも梁山泊に招きけるに、表宣ら三人之を聞き、晁宋兩人が徳を感じ、乃ち戴宗に對して云けるは、某が陣中にも亦三百餘りの人馬あり。若長兄微賤を奔給はずんば、某はいよ／＼梁山泊に誘引し給へ。某らあへて犬馬の勞を盡すべし。戴宗大いに悦んで云、晁宋兩頭領は、同じく一團の和氣あつて、能く賢を招き能く士を募給ふ。足下らもし肯て晁宋兩人を助け給はば、是則ち錦の上に花を添るがごとく、もしいよ／＼梁山泊に入らんと思ひ給はば、早々用意を調へて待ち給へ。我は先楊林と共に蘇州に馳、彼公孫先生を邀へて再び此所に至り、衆皆一同に梁山泊に歸るべし。表宣ら喜びに堪ずして、深く戴宗に謝しけり。戴宗楊林其夜は山陣に歇み、翌日早々三人の頭領を辭して、山を下りしかば、表宣ら三人同じく麓まで送つて終に一別に及びけり。扱て戴宗楊林は

すでに飲馬川の山陣を離れ、蘇州を望て急ぎけり。

病關索長街にて石秀に遇

借も戴宗楊林は不日に蘇州の城外に至り、旅宿を求し處楊林先戴宗に對して云けるは、公孫先生道家なれば、定て山間の村に住し、城下には住すまじ。戴宗が云、我も斯こそ思ふなりとて、兩人また旅宿を出て城外を遍く尋ねしかども、更に公孫勝を知る人なし。翌日又村里街盡く尋ねれども、知る人なかりしかば、戴宗楊林にいひけるは、公孫勝は必然城下に住すらんとて、第三日の朝飯後、兩人また城下に至て三四人に問しかども、公孫勝を知る者なし。兩人又百歩許進みし處、許多の人禮物を捧げ鼓樂を奏して、一個の人を迎へ來る。戴宗楊林立住てこれを見るに、傘の下に一個の人有りて若干の色黄なるに依て、人皆病關索と諱名せり。此楊雄昔日河南を出て此蘇州に至り、久しく落魄て在けるが、今日知府に擡擧られて兩院の押牢節級となりしゆゑ、牢中の下役人ども此日樂を奏し、楊雄を迎へ且喜びを賀すとなり。此時又路の傍より二十餘人の大漢子出來る。其内の頭たる大漢子は、踢殺羊張保と云者にして、常に城中城外に徘徊して、専ら人を惱す破落戶棟梁なり。此張保今楊雄が立身したるを見て、これを妨んと欲し、則ち諸人を推開て楊雄が前に至り、節級恭喜と呼はりしかば、楊雄急に答て云、某何ぞ長兄の賀に當らんや。只望らくは長兄某と共に去て一盃を酌給へ。

張保が云、我曾て酒の望なし。只汝に十貫文の錢を借ん。楊雄が云、我頗る長兄の面を識認ぬといへども、未だ曾て錢財を相交へず。いかんぞ我に問て錢を借んと云や。張保が云、汝今日百姓を惱して多くの禮物を求め、何ぞ少し分て我に借ざるや。楊雄が云、我今日幸ひ兩院押牢となりしゆゑ、其權機ある者どもは、皆我に禮物を送る。我あに敢て民を惱してこれを求めんや。汝却て我を妨んと圖るらん。張保これを聞て大いに怒り、彼六七人の漢子どもに下知して禮物を奪ひ取しむ。楊雄此光景を見て、汝何ぞ無禮をなすやとて、已に馳向て打散さんとせし處に、彼張保早くも楊雄が背後に繞り出て、則ち楊雄を緊と抱きしかば、又兩人の漢子來て、楊雄が手足を揪へて、少しも働せざりし處に、對面より又一人の大漢子、一荷の薪を挑て來りしが、張保が無禮をなすを見て、心中頗る憤り、頓て薪を卸して張保に問て云、汝は何ゆゑ押牢を妨るや。張保是を聞て大いに罵つて云、汝匹夫分量相應の乞食はなさずして、何ぞ妄りに閑事を問て多言を吐出すや。彼大漢子大いに怒り、忽ち足を飛せ張保を地上に踢倒し、其外の漢子らを又東西に打ち倒しければ、楊雄まさに身を脱れ、則ち平生の手段を出して暫時の間に十人許り打伏けり。張保これを見て敢て敵せず、彼禮物を奪ひ取たる漢子に跟て東の方に逃走る。楊雄益怒り急に後を慕うて追蒐ぬ。彼大漢子は猶頻りに路上を繞て、張保が手下の漢子どもを打伏けり。戴宗楊林はこれを見て、暗に彼大漢子を稱美して云、彼大漢子則ち人の人を欺を見ては、其弱き者を助け其強者を打つ、これ眞の豪傑なりとて、戴宗楊林近く前て云けるは、

願くは豪傑我が輩兩人が言を容ひて、彼らを饒し給へとて、遂に彼漢子を引て酒店の内に入ければ、彼大漢子深く是を謝しぬ。戴宗が云、我が輩二人は過路の旅人なり。今足下の猛勇を見ぬるに、恐らくは彼らを打殺し給ふこともやあらんと思ひ、敢て足下を諫めて此所に誘引しぬ。先宜しく三盃をくみ給へ。彼大漢子大いに謝して云、兩位の長兄我を諫めて禍ひを免れしめ給ふのみならず、猶且酒を賜はらんとのこと、我豈あへて是に當らんや。楊林が云、四海の内は皆兄弟なり。何の隔心かあらんとて、遂に酒を求て彼大漢子に勧め、酒已に數巡に至りぬる所に、戴宗彼大漢子に問て云、豪傑の高姓大名はいかん。彼漢子が云、某姓は石、名は秀、原金陵建康府の者にて、幼き時より武藝を學びぬ。若路次にて今日のごとき不平の事を見る時は、決して其弱き者を助け、其強き者を打つ。此ゆゑに人皆某を稱して拚命三郎と申。今は此蘇州に落零て薪を賣て營とす。戴宗が云、足下のごとき豪傑此所に流落て、乏き營をなし給ふこと、又惜からずやとて、一錠の銀を惠けるに、石秀固辭するを強て收しめ、足下願はくは此所を去て天下に名ある豪傑らと義を結び、浮生を樂み給へ。石秀が云、某頗る武藝を曉すのみにして、いかんぞよく寸進を得んや。戴宗が云、當世の天下朝廷不明にして奸臣縦横し、賢者は退き小人は進む。我向に一ツの事に因て梁山泊に上り、晁宋兩頭領の幕下に屬して、専ら浮生を娛しめ、唯朝廷の御赦免を待のみ。若一旦時節到來せば、忽ち官人ともなるべし。石秀嘆じて云、某も久しく梁山泊に赴かんと思へども、只恨らくは樞機なくして未だ行ず。

戴宗が云、豪傑若梁山泊に行んと思はれば、某肯て導べし。石秀これを聞き大に悦び、先戴宗ら兩人に問て云、兩長兄の高姓大名はいかん。戴宗が云、某姓は戴名は宗、此義弟は姓は楊名は林と號す。石秀これを聞て云、某曾て神行太保と云大名を聞き及けるが、しらす戴長兄の事にはあらずや。戴宗が云、神行太保とは則ち某がことなり。石秀忽ち拜伏して、山陣に赴んことを商議しける處に、外面に餘多の人尋ね來りしかば、三人の者これを見るに、則ちかの楊雄二十餘人の士兵を引て進み入る。戴宗楊林密に想道、再び騒動することやあらんとて、急に門外に馳出ければ、石秀は自ら楊雄を相迎へて云けるは、唯今押牢は何ゆゑ此に至り給ひぬるや。楊雄答て云、我方々長兄を尋候ひぬ。我先に思はず張保らに捉はれ、已に難義に及びし處に、幸ひ足下の助けを蒙り、遂に彼らを追散し、ふたゝび禮物等盡く取かへしぬ。是則ち足下の賜なり。石秀が云、某先に兩人の旅客に邀られ、此所にて三盃を酌しゆる、節級今我を尋給ふことは、曾て存せず候。楊雄又問て云、足下の高姓大名はいかん。石秀答て某姓は石、名は秀、金陵建康府の者なり。楊雄重て問けるは、今足下を邀て酒を勧めたる人は何れにあるや。石秀が云、彼兩人は今節級大勢を引來り給ふを見て、再び騒動することやあらんと思ひ、遂に此所を避行ぬ。楊雄が云已にかくのごとくんば、先彼らを皆歸すべしとて、則ち人毎に二碗の酒を興へて歸しければ、衆人都て酒を飲て退散しけり。楊雄又石秀に對して云けるは、足下此所には定めて親類もあるまじければ、某と義を結て兄弟の好みを誓ひ給へ。石秀これ

を聞て大に悦び、乃ちその年を問けるに、楊雄は二十九歳、石秀は二十八歳なりしかば、則ち楊雄を兄とし石秀を弟とし、頓て天地を拜し兄弟の義を結びけり。斯る處に楊雄が丈人潘公、七八人の漢子を引て直ちに酒店の内に走り入。楊雄忙はしく迎て問けるは、泰山此に來り給ひて何のことありや。潘公が云、我今汝が人と争をなしたることを聞しゆる、是を助んと欲て馳來りぬ。楊雄が云、此石秀と云人、我を助けて彼張保を打しゆる、禮物等ことごとく取回し、彼らを四方へ追散しぬ。此ゆゑに我今石秀と義を結んで、兄弟の約を誓ひぬ。潘公が云く、已にかくのごとくんば、我敢て石秀に三盃を勸んとて、頓て酒肉を具へて石秀を款待、潘公熟々石秀が英雄諸人に勝れたるを見て、則ち心中悦んで云く、かゝる豪傑若し果して我婿を助けなば、公門出入の人誰か敢て無禮をなす者あらんやとて、即ち石秀を愛し敬ふこと淺からず。三人遂に酒店を出ければ、石秀は又薪を荷て相從ひ、直ちに楊雄が家に至りし處に、妻出迎へて内に入りしかば、楊雄則ち石秀を引いて妻にまみえしむ。此妻は名を巧雲と云て、初め一人の夫に嫁しけれども、此夫死しけるゆゑ、今又楊雄に嫁していまだ一年を経ざるとなり。石秀此妻を見て、忙はしく禮を行ひしかば、楊雄則ち兄弟の盟をむすびしことを妻に告、此より石秀を家に留て、懇情殊更深かりけり。扱戴宗楊林兩人は楊雄が大勢を引て來りぬるを見て、若また禍を引出すこともやあらんとて、急に城外に出て旅宿に歸り、翌日又公孫勝をたづねしかども、曾て消息を知る人あらざりしかば、兩人暗に商議して云、城中城外遍く尋ければ、曾て消

息しれず。此上は先梁山泊に回りて他日又來るべしとて、其日蘇州を出て、再び飲馬川の山陣に至りしかば、裴宣鄧飛孟康ら三人、已に用意を調へ、一行三百餘りの軍馬を、官軍の軍行に詐り扮作、星夜に馳て梁山泊を指て急ぎけり。戴宗公孫勝に遇すといへども、四人の豪傑三百餘の軍馬を得たるは、梁山泊一分の光りを添ると云つべし。扱又一日楊雄が丈人潘公楊雄と石秀とを呼んで云けるは、我家後門の外に一條の斷路小街あり。又一間の空房あり。此所井水も便よく聊も諸用差つかへのなき地なれば、我石秀と商量て彼空屋を修理し、大に店を開き、石秀を此家に移し商賣をせしめんと欲す。此こといかゞ有べきや。楊雄が云、石秀はまで薪を荷うて營みとせしは、頗る勞煩の業なり。泰山今居ながらの産業をせしめんとならば、大に可ならん。石秀だに嫌はずんば、我何ぞ別に意あらん。しらす賢弟はいかゞ思ふや。石秀が云、我多く潘公の厚意を賜ふ。何ぞ懸命に背かんや。潘公大に悦び、頓て造作を加へて、坊猪圈を構へ數十の肥猪を畜ひ、猪肉の店を開き、肉案子盆器の類も奇麗に用意し、潘公年來の舊識などへも、序開販の吹聴をなし置き、先吉日を擇で石秀此家に移り、商賣の備へ全く調りしかば、最上吉辰に大吉利市と祝して發店せしに、衆鄰舍潘公が知音知己楊雄が勤に樞機ある者まで、若干家より祝賀の積物等をなし、遠近より新肉鋪を開帳と聞て來り求人多く、其後引續て商ひ殊に繁榮せしかば、石秀も大に心を安んじ、潘公楊雄等へも心を傾け懇切を盡しけり。かくして兩月あまりを過けるに、光陰迅速なる哉、時はや初冬に移り、楊裘を更る節に遇ひ、石秀一日

早に起冬の新衣を着し、五更の頃より外縣に出て猪の買入しけるが、彼此に求るゆゑ、第三日目の黄昏前に回り家を見るに、舗店を開たる體もなく、家内に入つて見るに、肉案其多商賣の用具、家財等まで盡く收拾竈の邊まで何一品もなく片付ありしかば、石秀心中奇異少からず。諺に云、人千日の好なし。花百日の紅なるなしと云なるが、果して然りとて、良久しく沈吟し、此意を察し思ふに、楊雄は我と兄弟の約を誓ひしことなれば、忽ち我を疎んずることもあるまじ。殊に公務繁く家事を顧る暇もなき人なり。かたゞ以て其妻必定我を嫌ふ所あつて、かく留主の間に家財を收拾しめ、我に家を出よとの意を曉さしむるに疑なし。我已に此意を曉す上は、あによく片時も此家にあらんや。已に戴宗楊林の誘引にて、直に此所を去り梁山泊に入らんとせしに、楊雄が懇切に暫く其義を止たれ、今斯る時宜に臨んでは、潘公へは故郷に歸らんことを辭とし、是迄の懇志を厚謝に及び、梁山泊に走るにしかじと、直ちに潘公が家に至つて則ち潘公にまみえて云けるは、某故郷を出て六七年に及びしかども、未だ曾て歸らず。此ゆゑに明日早々別れを告て、故郷に歸らんと欲ふ。潘公が云、汝必ずかくのごとき事を云給ふな。我已に汝の心を察せり。汝の留守の内に、家財を拾收たるを見て、斯云給ふならん。此事に於ては少々縁故あり。我女ははじめ王押司と云人に嫁しけれども、此人不幸にして死せしゆゑ、今また楊雄に嫁せり。明日は則ち王押司の三回忌に當るゆゑ、出家を請て法事を做んとす。これに依て汝の家を空て、供人らを入置んと圖り、則ち家財等を收拾たり。必ず疑ひを休て猶此

所に逗留し給へ。況や我齡七旬に及んで、客に陪侍すること能はざる間、明日は足下我に替つて宜しく出家らを款待給へ。石秀が云、實に然らば我あへて留り申さんとて、再家に歸りけり。翌日石秀は門前に立出て、僧の來るを待居ける處に、一人の年少なる和尚、一人の道人を従へて、はや門前に至り、則ち石秀に對して問訊をなしければ、石秀急に禮を還して内に誘引し、頓て潘公を呼出し、彼和尚に遇しめければ、彼和尚先潘公に對して云けるは、我が父何ゆる久しく寺には至り給はぬや。潘公が云、我俗事繁多にして、寸暇を得ざるゆゑ、多日寺にも參詣せざりしとて、閑談半なる所に、彼巧雲が云、我俗事繁多にして、先づ石秀を呼て問けるは、和尚至り給ひぬるや。石秀が云、一人年少なる和尚至れり。巧雲が云、其和尚は乃ち裴如海と云て、我父を拜して義父とし給ひぬるゆゑ、我爲にも又義兄なり。尤も能經を念給ふ。石秀此言を聞て、心中はや疑しく思ひけり。彼巧雲已に出て和尚に遇ければ、石秀は暗に傍よりこれを望み見るに、彼和尚巧雲を見て合掌問訊して云けるは、賢妹恙なきや。巧雲答て我常々師兄の事をのみ渴想す。いかにぞ消息をなし給はぬや。和尚が云、我頃日新に水陸堂を建立しけるゆゑ、賢妹を請て遊行せしめんと思へども、節級に怪まれんことを恐れて、未だ賢妹を邀す。巧雲が云、我夫楊雄は曾て拘束ならず。我已に宿願もあれば、近日貴寺に參詣すべしとて、互に意を含て談話しければ、石秀を見て、暗に想道、我常々彼女を見るに、多く風話を叙て心正しからざる體なりけるが、果して此僧に私情を通せんと欲と覺ゆ。遮莫、我必ず義兄に替て事を正

さんものをと、自ら牙を咬、遂に簾を掲て彼和尚の前に至りしかば、巧雲早くも和尚に對して云けるは、此人は是我夫楊雄が義弟なり。裴如海が云、先にも已に見えしかども、未だ誰人たることを聞ざりしに、楊雄居士の義弟とや、しらす高姓大名はいかん。石秀が云、わが姓は石名は秀と號す。我専ら人の爲に力を出し、我身の禍を避ざるゆゑ、人皆拚命三郎と號せり。和尚よく我を識認給へ。裴如海是を聞て心中頗る怕れ、則ち巧雲に對して云けるは、我ははや諸の僧衆を請て來るべき間、暫く相待給へとて、已に門外に出れば、巧雲は又樓上に登りけり。石秀は彌心中に疑ひ、自ら門邊にあつて待けるに、裴如海頓て衆僧を引て來りしかば、潘公石秀これを迎て内に入り、茶已に了讀經肇りける處に、彼巧雲靈前に出て、自ら香を拈り三拜をなしければ、裴如海は只顧巧雲を望見て、慈心大に亂れけり。石秀傍に在て、此光景を看心中甚だ冷笑ひけるに、須臾にして念經を了り、衆僧皆座に就て、齋食を吃し、遂に潘公石秀に別れを告歸りし處に、獨り裴如海は後に留りて、暗に巧雲と戲弄をなし、遂に私情を通じければ、石秀壁の縫間より之れを伺ひ見、自ら嘆息して想道、我が義兄楊雄は誠に正しき豪傑なるに、此のとき淫婦を娶り給ひしこと、何の不幸かこれに過んやとて、已に刀を抜て兩人の者を殺さんと欲しけるが、又心中に想ひけるは、我今楊雄に知らせずして、彼ら二人を殺さば必定事分明ならずして、我が罪となるべし。今日は先これを忍びて、重て殺すとも晩からじとて、空しく刀を鞘に收めて控へけり。彼巧雲は此日を始として、裴如海に心を傾け、毎度會

合して私情を交へ、恰も謀と膠のごとくなり。一日石秀楊雄を訪ひければ、楊雄則ち石秀を迎へて云けるは、我専ら公用に絆られ、久しく賢弟と酒を酌ざりしに、今日は幸ひ閑暇を得て寂寞なる間、去來酒樓に上つて三盃を酌んとて、遂に石秀を引て家を出、直ちに一軒の酒店に至つて樓に上り、頓て酒肉を求て石秀に勧めけるに、石秀は只頭を低て悦ぶ色なかりしかば、楊雄これを怪み問けるは、賢弟何がゆゑに斯く頭を低て沈吟するや。恐くは家内の男女賢弟を欺たるに因て、これを憤るにあらすや。石秀が云、家内の男女曾て我を欺す。我今長兄の厚恩を蒙りしゆゑ、一句の言を長兄に告んと欲す。あへて是を云べきや。楊雄が云、賢弟もし告んと思ふことあらば、速に語るべし。何ぞ必ずしも沈吟するや。石秀が云、長兄は毎日官府に出て内に居給はざるゆゑ、家内の悪事を知り給ふまじ。長兄の妻巧雲は原正しき賢女にあらず。我毎度不義のことを看けれども、便機を得て長兄に告んと思ひ、延引今日に及べり。楊雄が云、我常に他出して家内の事は總てこれをしらす。汝宜しく不義の對手を告よ。石秀が云、向に巧雲親潘公の家にて、先夫の法事を做し時、彼裴如海と私情を通じ、此より裴如海毎度長兄の家に忍び入るとなり。かくのごとき淫婦を留めて何の益かあらん。長兄明らかに曉し給へ。楊雄聞もあへず、大に怒て云、此淫婦いかんぞかくのごとく我を欺くや、我是を殺さずんば有べからずとて、忽ち顔色變じければ、石秀諫て云、長兄先怒りを息給ひて、今晚は何事も云給はず、唯常のごとくにもてなし給へ。明晩は詐て當直たるよしを云給ひて家を出給へ。然らば彼惡僧必

然來るべし。某は後門に待べき間、長兄は又三更の時分ふた、び回り、前門を敲給へ。此音を聞なば彼僧急に後門より逃出べし。此時某これを捉んに何の難きことかあらん。楊雄此言を聞て可なりと同じ、遂に酒樓を下りて街に出けり。

楊雄醉て潘巧雲を罵る

斯る所に四五人の下官きたつて楊雄に對して云けるは、今知府相公花園の内にいで給ひて鎗棒を見給はんとのことなるに、節級早く來つて某らとともに一棒を使ひ給へ。楊雄これを聞て則ち石秀に向つて、我は先官府に赴かん。汝宜しく家に歸るべしとて、遂に下官らと共に、知府が後園に至つて棒を使ひしかば、知府これを見て大いに悦び、頓て酒を以て楊雄を賞しけるに、楊雄一連に五七碗の酒を飲で大いに爛醉し、黄昏に及んで家に歸りしかば、妻みづから楊雄を助け床の上の上らせける所に、楊雄妻が面を見て、忽ち怒り心頭より起り、則ち妻を指さし、大いに罵つて云く、汝淫婦我必ず汝を殺すべきぞ。妻これを聞て甚だ恐れ、敢て聲をもせず傍に臥けり。漸五更の時に至つて楊雄纔に醒しかば、則ち妻を呼で水を求めける處に、妻頓て水を携へて與へければ、楊雄これを取て云けるは、我宵には大醉したるゆゑ、定めて汝を責りたることもあらん、必ずこれを恨ること勿れ。彼巧雲が云く、丈夫常に酔ひ給ふ時は、早速歇み給ふに、今宵は何ゆゑにや、我を責り給ひし詞の末、何とやらん心を安んじがたし。楊雄が云く、汝必ず心を煩はすことなかれとて、常の體にもてなし、少し

も怒る色なかりけり。暫くして云けるは、我義弟石秀は頃日快からずしてありぬるに、汝よろしく酒肉を具へ彼を慰んや。巧雲これを聞て、忽ち涙を洒ければ、楊雄問ていはく、汝流涕するはいかん。我宵に汝を責りたるは原本心にあらず、都て酒興に乗じてのことなり。必ず再三是を恨むること勿れ。巧雲涙を掩へて云けるは、我父母初め我を王押司に嫁せしめける處に、王押司不幸にして早逝ありしゆゑ、今再び丈夫に嫁し、我心大いに悦ばしく思へども、丈夫は却つて我を他人に欺かしめ給ふ、是則ち我を愛し給はぬに因てなり。楊雄が云く、誰人敢て汝を欺くや。汝速にこれを語れ。巧雲が云く、我もと云まじきと思へ共、丈夫却つて彼が爲に哄騙れ給はんこともあるべければ、我今これを告ん。必ず十分に怒つて事を破り給ふことなかれ。彼石秀初め來りし時は、老實にして、肆なることもなかりけるが、頃日は已に志驕り、丈夫の留守なる時は、一向我に戯れ不義の言を云ぬれども、我曾て心上に掛すして忍びけるに、此兩日は頻りに我を欺く。このゆるに今丈夫に告知せ申す間、向後必ず彼を憐み給ふべからず。楊雄是を聞て心中大いに怒り、彼已に是らの不義を做んと思ひ、却つて裴如海がことを詐つて、預じめ我を欺きぬること、甚だ以て惡むべしと、再三憤りて妻に對していはく、彼已に此のごとき不仁不義の者ならば、早速家を追出すべし。汝心を安んせよとて、翌日潘公に告て、石秀が家の道具等、悉く打碎きて棄しめければ、石秀は原來聰明の者なれば、はや是を察し思ひけるは、昨夜楊雄酒に酔て、我が云しことを妻がまへにて漏し、却つて妻に誑れたるに疑ひ

なし、我且速に退いて、別に宜しき計をなさんとて、包袱を背に負て家を出で、則ち潘公に別れを告て云けるは、我久しく此所にあつて深く懇情を蒙り、誠に感激に勝すと遂に辭し、門外に馳せ出で則ち近邊に旅宿を求めて休息し、自ら心中に思ひけるは、楊雄我と義を結んで、兄弟の盟をなしかるに、若し今日此等のことを分明に正さずば、必竟我獨り不義に陥りて、天下の豪傑に笑はるべし。且楊雄も又淫婦の毒殺に遇んは眼前なり。楊雄今淫婦が言を信じ、我を恨むること深し。我縦ひいかやうの分説するとも、我が言信すまじ。彼若赤心を識ものならば、己が心魂大丈夫ならざるを愧べきものなり。今我宜しく證見を求めて、此ことを分明ならしめんとて、翌日楊雄が當直の夜を伺ひ知、其夜四更の時分旅宿を立出けり。

石秀智をもつて裴如海を殺す

石秀は中夜より旅宿を出で、暗に楊雄が後門の邊に躲れ、裴如海が出るを待わびて在けるに、漸五更の左側に至つて、一人の頭陀手に木魚を持ち、後門の外に出て左右を窺ひ見るに、石秀忙はしく走り倚て彼頭陀を捕へ、則ち低言罵つて云けるは、汝若し聲を高むることあらば、我今汝を殺すべきぞ。汝若し命惜しくば、裴如海が惡事を一々詳に我に告ば一命を饒さん。彼頭陀慄き抖て云けるは、汝肯て我を害せずんば、一點も詐らず備細に語るべし。石秀が云く、已にかく在んには、我いよく汝を饒さん。速に告知らせよ。もし少しにても偽る所あらば、必ず頭を刎べきぞ。彼頭陀が云く、如

海和尚今専ら楊雄が妻と私情を通じ、毎度此家に忍び入て擅に娯をなす。少刻回らんと欲するゆゑに、我門外に出て四方の動靜を窺ふ、是則ち實情なり。石秀又問て云く、裴如海は今何れの所にありや。頭陀が云く、彼尙床の上に歇みある。此事原我一人の下女と、内外の消息を窺うて、彼ら兩人がことを助くるゆゑ、彼男女毎度安心して斯優に歇む。我今此木魚を敲て響するときは、彼早速出來る。是又我輩が相圖なり。石秀が云く、我先汝が衣服と木魚とを借るべしとて、頓て衣裳を剝取、遂に刀を抜て頭陀を斬殺し、彼木魚を取て只願敲しかば、裴如海此響を聞て時分は好きぞと心得則ち後門より走り出ける處に、石秀早くもこれを捉へ、暗に低言罵つて云けるは、汝必ず聲を高むることなかれ。若敢て聲を揚ば、我今汝を殺さん、速に衣裳を脱で我に與へよ。裴如海已に石秀たることを知りしかば、豈敢て聲を傲んや。則ち衣裳を脱で石秀に與ふ。石秀これを取て己が身に着し、已に又刀を揮て裴如海が頭を刎急ぎ旅宿に回りに、暗に門を開き、再び房間の内に入て歇みけり。茲に又當地の城中に、糞粥を賣て營とする王公と云者ありけるが、此時分一擔の糞粥を荷て商賣に出、まさに此所に至つて裴如海が屍を踏で眞倒に倒れ、これ何人なるにやと、手を伸し探り見るに、二人の僧斬殺されてありしかば、王公忽ち大いに駭ぎ、聲をあげ呼はりけるに、隣家の者どもこれを聞、各門を開き馳出みるに、死人と王公と倒れありければ、衆皆大いに駭ぎ、先王公を捉へ、官府に引渡さんとて一同に駭ぎけるが、死人も見届け、王公を拖り、蘇州府に至りしかば、知府則ち廳上に出て

其訴を聞に、諸隣家皆楷の下に跪いて、此王公と申す者、今朝某らか門前に在て喊びしゆゑ、面々悉く出てこれを見しに、一荷の糞粥地上に潑翻、其傍に兩個の死人あり。一人は和尚、一人は頭陀各身に衣服を着せず。頭は刎落され其側に又一挺の刀あり。此ゆゑに王公を揪へて訴へ奉る。王公も又告て云く、某毎日糞粥を賣て營とす。常には五更過の時分より出てこれを賣ふ處に、今朝は例より些早く出しゆゑ路もいまだ見分けがたく、一向走り行し處に、不圖踴跌て地上に倒れ、一荷の糞粥悉く潑翻けるゆゑ、驚きて地上を見けるに、兩個の死人ありしかば、恐懼の餘り覺えず聲を揚て呼はりし處に、諸の隣家出て遂に某を揪へたり。唯闇くして跌倒れしのみにて、死人のことは何ゆる、何人誰に殺されたるや、更に知る所なし。伏して願はくは、相公明にこれを察し給へ。知府これを聞て、まづ王公を楷の下に留置、則ち役人等を馳て死人を檢驗させる處に、頓て立歸りて報じけるは、二人共に報恩寺の僧なり。各頭を刎落され、傍に一挺の刀あるを持參せりとて、これを知府に獻せり。知府これを見て則ち當番の孔目に對して評議を求めしかば、孔目告て云く、此兩僧は原同寺の僧なるに彼處に於て殺されしは、必定道ならぬことを做出し、兩人殺死に及びしなるべし。王公實に是を知るまじ。二人の死人縁故あるべきことなれども、今急に糺明せん手掛りもなし。王公を免し隣家共を回らしめ給へかし。知府然りと同じ、王公に構なく諸隣家の証は聞置きて皆引取しむ。此こと専ら沙汰ある程に、彼の淫婦巧雲もこれを聞大いに駭ぎ、只心中に苦しみけり。此時楊雄も已

に次第を聞暗に想ひけるは、是必定石秀が所爲なるべし。我前日誤て彼を恨みけるゆゑ、彼證見を看せしめんが爲、兩人の僧を殺しつらん。我先彼に遇てことの虚實を問はんとて、遂に街の邊に出ける處に、背後に人あつて長兄何れに行給ふやと呼はりしかば、楊雄急に頭を回して其人をみるに、是則ち石秀なり。楊雄が云く、我賢弟を尋ねんと欲しけれ共、何れの所に在るを知らずして、甚だ是を憂ひぬ。石秀が云く、長兄先我旅宿に至つて談話し給へとて、遂に導て旅宿に至り、則ち告て云く、某が云しこと偽なきや。楊雄が云く、我前夜酒後に不圖言を洩し、却つて姪婦に再び誑れて賢弟を恨みぬ。此ゆゑに我今日汝を尋ね遇て罪を謝せんと思ふなり。望むらくは、賢弟怒りを息我が過りを免さんや。石秀が云く、某不才の小人たりといへども、頗る道理を曉しぬるに、いかんぞ敢て長兄に違かんや。某初め長兄に告たるは、後々は長兄姪婦が毒殺に遇ひ給はん。然らば天下の豪傑は大丈夫の名を赦すまじ。我たま〜兄弟の義を結びながら、長兄を人の笑ひものたらしむるは、頗る忍びざる所あつて實義に依て密に悪事を告げぬ。然れども我赤心長兄に通じがたき所あるゆゑ、我遂に裴如海と頭陀とを殺せり。長兄是を見て、速に疑ひを解給へとて、則ち衣裳を取り出し見せ、是は則ち兩僧が着したる衣裳なり。我是を證見にせん爲、剥取て置きたるを尊覽に呈す。我一旦兄弟の義を結んで、我首今飛とも盟約に差ふことなし。楊雄愧入て、賢弟必ず我を恨むることなけれ。我れ今更面目を失なひて、賢弟に述べ言もなしとて、又一たびは大いに怒り、我今宵姪婦を殺し、賢弟に見せしめ

んと云時、石秀阿々と笑ひ、長兄は官司の法度も知り給ひつらん、何ゆゑ此らのことを云給ふや。古より姪婦を殺すには、先奸夫を捉へ、然して後これを殺すことなり。彼奸夫裴如海は已に我是を殺せしに、長兄今又誰を奸夫として、淫婦を殺し給ふや。是乃ち證見もなきことなれば、若し率爾に淫婦を殺し給は、却つて人殺しと成て大なる禍を蒙むり給ふことあらん。しかし我議に従ひ給は、淫婦を殺し給ふとも、十分禍あらじ。楊雄が云く、賢弟何等の計有て、禍を免れしむるや、我が爲に委しく告候へと申しける。石秀何の答へをなすや、五篇目を讀まば明かなるべし。論者いはく、戴宗公孫勝を求め得ず、飲馬川の山陣の三頭領を誘引し、楊林と共に梁山泊に上るとありて、晁蓋宋江に公孫勝を尋ね得がたき旨、且又楊林、裴宣、鄧飛、孟康四人の豪傑に遇て伴なひたる次第を告て、諸の豪傑まで對面せしむることを書べきことなり。作者これを落せし間、此次に至つて梁山泊鐵面孔目裴宣を立て軍政司とすと云、又宋江祝家莊を攻る備へに、楊林鄧飛などの名出たれば、是ら皆以前より梁山泊に在し人のことし。又前の編、武大郎武松の段に、武大郎が妻潘金蓮武松に戀慕し、忽ち武松に羞辱められ、却つて夫の留主に武松我に戲弄をなせりと武大郎へ訴へ、此卷には楊雄が妻潘巧雲、夫の留主に石秀我に戲弄をなせりと楊雄に告。奸夫を需る淫婦、此の詞を以て夫を誑く定例のごとし。外には工夫も思慮もなきものにや。

水滸傳(第一卷)終

大正元年九月廿二日印刷
大正元年九月廿五日發行

水滸傳一

〔非賣品〕

《假製本》

編輯者兼

國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作
東京市神田區雜子町三十二番地

印刷者

平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地



不許
複製

終

